

「資本論を読む会」便り

No. 17-18合併号
2017.1.9

明けましておめでとうございます。

世界も日本もますます大きく揺れ動くようになるかも知れません。未来を見据えるために今年もしっかりと資本論から学びたいと思います。

昨年、参加される方が増え議論がいつそう活発になり、理解がより深まったように思われます。議論を通して、既に読んだ箇所の理解の不十分さに気づかされたりもしました。今年も新しい参加者を迎えられることを願っています。

さて今回は、今読み進めている第1章第3節のあらすじを作ることに挑戦します。これまで細かな点にも注意して、難所から滑落しないように相当の期間をかけて歩を進めてきました。ですのでこういう作業も意味があるかと思います。

※ 編集人の事情で、第18回例会後の発行を飛ばして、今号を17・18合併号としました。

★資本論の目次

まず、資本論の目次を見てみます。

第1部 資本の生産過程

第1篇 商品と貨幣

第1章 商品

第1節 商品の2つの要因 使用価値と価値（価値実体 価値量）

第2節 商品に表わされる労働の二重性

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

1 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

2 相対的価値形態 a 相対的価値形態の内実 b 相対的価値形態の量的規定性

3 等価形態

4 単純な価値形態の全体

B 全体的な、または展開された価値形態

1 展開された相対的価値形態

2 特殊の等価形態

3 全体的な、または展開された価値形態の欠陥

C 一般的価値形態

1 価値形態の変化した性格

2 相対的価値形態と等価形態との発展関係

3 一般的価値形態から貨幣形態への移行

D 貨幣形態

第4節 商品の呪物的性格とその秘密

第2章 交換過程

第3章 貨幣または商品流通

第2篇 貨幣の資本への転化

・・・・・・・・・・・・・・・・（以下省略）・・・・・・・・・・・・・・・・

資本論は資本の運動法則を明らかにするわけですが、資本が登場するのは、見られるように第2篇からです。標題から、資本は貨幣が転化したもののようです。その貨幣は、第1篇 商品と貨幣 で登場します。その第1章では商品を分析し、第3節で、商品の本質である価値の現象形態(価値形態)が、貨幣にまで発展するその仕組みを明らかにしています。ここが、マル

クス自身最も難しいと言っているところです。

この「読む会」はまだ第1章を終わっていませんが、ここを過ぎると、第2章 交換過程、第3章 貨幣または商品流通へと進みます。

★第1節 商品の2つの要因…

- ・商品の使用価値と価値を持つ(商品の使用価値であり価値でもある、とも言う)。
- ・価値は商品の交換価値として現れる。
- ・価値の実体は抽象的人間労働であり、価値の大きさは抽象的人間労働の量である。
- ・抽象的人間労働とは、労働の持つ有用的側面(生産物にいろいろな有用性を与える機能=具体的有用労働)を捨象したもので、頭脳を働かせ筋肉を緊張させ、といった、あらゆる労働に共通な側面を指す。
- ・抽象的人間労働の量は、生産に要した社会的平均労働の時間で測られる。

★第2節 商品に表わされる労働の二重性

- ・商品は、具体的有用労働と抽象的人間労働が、結実したものである。
- ・独立した私的労働による、社会的分業の生産物が商品となる。
- ・有用労働はすべての社会形態から独立した、人間の存在条件であり、自然素材に働きかけて使用価値を生産する。
- ・抽象的人間労働は、普通の人間の平均的な単純な労働である。資本主義社会の労働者の不断の形態転換(この仕事からあの仕事へ)がこれを示している。
- ・複雑労働の量は単純労働の量に換算されるが、一つの社会的過程によって生産者の背後で確定される。
- ・有用労働の生産力の上昇は、同じ使用価値の(商品)価値を減少させる。したがって、生産力の上昇が使用価値総量の生産に必要な労働時間の総計を短縮する場合、使用価値の量が増大しても、その価値総量は逆に低下することがあり得る。

★第3節 価値形態または交換価値

- ・商品の使用価値の形態は、商品体そのものであり、商品の現物形態である。
- ・商品の価値は内在的なものである。商品の価値の現象形態を価値形態という。
- ・商品の価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちのみ現れる。よって研究は、価値が現象している形態、交換関係に戻ることから始める。
- ・「『資本論』における価値形態論の目的は、商品の価格すなわち貨幣形態の謎を、そしてそれと同時にまた貨幣の謎を解くことにある。ここに貨幣形態の謎というのは、一般に商品の価値が特殊な一使用価値——金——の一定量という形態で表現されることの謎であり、貨幣の謎というのは、この場合金の使用価値——本来価値の反対物たるもの——がそのまま一般に価値として妥当することの謎である。」(久留間「価値形態と交換過程論」)

★第3節 A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

- ・x量の商品A=y量の商品B またはx量の商品Aはy量の商品Bに値する。
(20エレのリンネル=1着の上着 または20エレのリンネルは1着の上着に値する。)
- ※ 以下では、これらの式を前提しています。

★第3節 A 1 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

- ・リンネルは自分の価値を上着で表している → 相対的価値形態にある, という。
- ・上着はリンネルの価値を表す材料である → 等価形態にある, という。
- ・相対的価値形態にある商品と, 等価形態にある商品の関係
 - ① 不可分性: 密接不可分な関係にあり, 互いに属しあい制約している
 - ② 対極性:
 - ・リンネルの価値は別の商品によって(=相対的に)のみ表現できる。
 - ・相対的価値形態は別の商品が等価形態にあることを前提とする。
 - ・等価形態にある商品は, 価値表現の材料となっているだけである。

★第3節 A 2 a 相対的価値形態の内実

- ・単純な価値表現において
リンネルと, 上着はともに同じ性質・同じ実体のもの, すなわち価値である。
リンネルと上着は同じ質に還元された上で, 量的に比較されている。
リンネルの価値(だけ)が表現されている。
上着は, 価値の存在形態として, 価値物(価値が目に見える物)として現れる。
上着は, リンネルの価値を, 上着の現物形態(使用価値)で表している。
- ・商品の価値性格
 - 1) 抽象的人間労働という「価値を形成する労働の社会的な性格」
 - 2) 「人間労働の凝固体」としての価値の「対象的性格」
- ・リンネル = 上着 (という価値関係)の基礎には
リンネルに含まれる労働=上着に含まれる労働 の関係がある。
(織布労働) (裁縫労働)
故に裁縫労働は2つの異種労働の共通な質(抽象的人間労働)を体現している。
織布労働も価値を織るかぎり, 抽象的人間労働である。
- ・上着は, それを作った具体的有用労働である裁縫労働そのものが, ただ単に人間労働力一般だけが支出されたものとして通用しているので, 上着の具体的な姿態そのものが価値そのものとして, 価値体として通用している。

★第3節 A 2 b 相対的価値形態の量的規定性

- ・相対的価値形態は, 同時に, 量的規定性を持ったものでもある。
- ・商品の生産に必要な労働時間は, 織布労働, 裁縫労働の生産力が変われば変化する。
- ・この変化の, 価値の大きさの相対的表現への影響
20エレのリンネルの価値が a 倍, 1着の上着の価値が b 倍になったとすると, 価値関係は
$$20\text{エレのリンネル} = \frac{a}{b} \text{ 着の上着}$$
となる。(1)商品の相対的価値は, (1)その商品の価値が不変でも, 変動しうる。(2)その商品の価値が変動しても, 不変のままであり得る。(3)1商品の価値が変動し, 同時にその相対的価値が変動しても, それらの変動が一致するとは限らない。
- ・相対的価値表現だけを見ても, 価値量の変化は分からない。

★第3節 A 3 等価形態

- ・ここで等価形態の謎(貨幣の謎の根源)が解かれている。
- ・等価形態にある上着はリンネルの価値量を表現している。上着は表現の材料であり, 上着

の自然形態(物的形態) そのものが価値を表わしている。

- ・ここでは、上着はリンネルに対し、「直接」に交換可能である。
- ・上着の価値量は、価値形態によって決まるのではない。
- ・等価形態の

第1の特色

使用価値(商品の現物形態)が、反対物の、価値の現象形態(価値形態)になっている。

上着のこの役割は、リンネルとの価値関係の中に上着が置かれる限りでのこと。

上着が表わしている価値は、リンネルの価値。

上着の自然形態が価値を表わしているのも、価値が上着の自然属性のように見える。

第2の特色

上着を作る具体的労働が、反対物である抽象的人間労働の現象形態になること

第3の特色

上着を作る私的労働がその反対物である直接に社会的な形態にある労働になること

★第3節 A 4 価値形態の全体

- ・商品Aの価値

質的には 商品Bの、商品Aとの直接的な交換可能性によって表現されている。

量的には 一定量の商品Bの、一定量の商品Aとの交換可能性によって表現されている。

「交換価値」として表示されることによって、独立に表現されている。

- ・商品の単純な価値形態は、商品に含まれる使用価値と価値との対立の単純な現象形態
- ・単純な価値形態の歴史的考察
 1. 労働生産物は、どのような社会でも使用対象である。
 2. 労働生産物が商品となるのは、ただ、ある歴史的発展段階においてに過ぎない。
 3. それは、生産に支出された労働が、その生産物の「対象的」属性＝生産物の価値 として表わされる、歴史的な一時期である。
 4. 単純な価値形態は、単純な商品形態。商品形態の発展は価値形態の発展と一致する。
 5. 価値形態は商品生産の滅亡と共に滅亡する。
- ・単純な価値形態 リンネル＝上着 は、
 - ① 上着以外の他の商品との質的な同等性・量的な割合、を表わしていない。
 - ② 上着は、リンネルに対して等価形態＝直接的交換可能性の形態、を持つだけ。
- ・単純な価値形態の、より完全な価値形態への移行
リンネルが任意の商品と価値関係に入るに従い、様々な単純な価値形態が生ずる。
リンネルの価値形態の数の上限は、リンネルと異なる商品種類の数。
リンネルの個別的な単純な価値形態の全体 → 「全体的な、または展開された価値形態」

★第3節 B 全体的な、または展開された価値形態

20エレのリンネル＝1着の上着

20エレのリンネル＝10ポンドの茶

20エレのリンネル＝40ポンドのコーヒー

20エレのリンネル＝1クォーターの小麦

20エレのリンネル＝2オンスの金

20エレのリンネル＝1/2トンの鉄

20エレのリンネル＝ その他

★第3節 B 1 展開された相対的価値形態

- ・価値そのものが、はじめてほんとうに、無差別な人間労働の凝固として現れる。
なぜなら、リンネル以外のどの人間労働も、それがどんな現物形態を持とうとすべてリンネルの価値を形成する労働に等しいとされているから。
- ・リンネルは商品世界に対して社会的な関係に立つ。商品としてこの世界の市民である。
- ・商品価値はそれが現れる使用価値の特殊な形態には無関係であることが示されている。
- ・リンネルの価値はどの商品で表されようと同一である。
- ・交換が商品の価値量を規定するのではなく、価値量が商品の交換比率を決定することが明らかである。

★第3節 B 2 特殊的等価形態

- ・リンネルの等価物となっている個々の商品は、他の商品の中の一つの特殊的な等価形態となっている。
- ・それらの商品体に含まれる様々な特定の有用労働も、その数だけ、人間労働一般の特殊な現象形態として認められている。

★第3節 B 3 全体的な、または展開された価値形態の欠陥

- ・第1に、等価形態に立つ商品の連鎖が、新しい商品が出現するたびに無限に延長され完了しない。
- ・第2に、この連鎖はばらばらな雑多な価値表現の多彩な寄せ木細工をなし、統一性がない。
- ・第3に、任意の商品の相対的価値形態は、互いに異なる価値表現の列をなす。
リンネルの相対的価値形態の列の中に、リンネルは特殊的等価形態としては入っていない。が、鉄の相対的価値形態の列の中には、リンネルが特殊的等価形態として入っている。
- ・展開された価値形態には、互いに排除しあう制限された等価形態があるだけ。
特殊の商品等価物に含まれている特定の具体的有用労働も、人間労働のの特殊な現象形態でしかない。
- ・人間労働は統一的な現象形態を持っていない。
- ・等価形態にある商品の所持者から見ると、彼らは彼らの商品をリンネルと交換する。すなわち、リンネル以外の商品はすべて、リンネルを等価物とする。

★第3節 C 一般的価値形態

1着の上着	=	} 20エレのリンネル
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1クォーターの小麦	=	
2オンスの金	=	
1/2トンの鉄	=	
その他	=	

★第3節 C 1 価値形態の変化した性格

- ・ 一般的価値形態においては,すべての商品が自らの価値を,ただ一つの商品,リンネルで表している。
- ・ 諸商品の価値形態は
 - (1) 単純である。
 - (2) 統一的である。すなわち,一般的である。

ここまでが,これまで読み進んで来たところです。さほど重要でないことを書くかわりに重要なことを落としている,などということがなければ良いのですが……。

お気づきの点がありましたら,次回以降の例会でご指摘いただければ助かります。

◆わかりにくい語句

読む会の議論の中で何度もその意味を確認した語句を集めてみました。文脈や言い回しの違いで意味が微妙に変化している語句,意味の違いが微妙な語句などです。チェックしておくとも便利かもしれません。

有用性と使用価値

使用価値がある,使用価値である

交換価値,価値,商品価値,値打ち,値する

価値がある,価値である

価値物,価値体,等価物

価値表現

社会的,私的

有用労働,具体的労働,具体的有用労働

人間労働,抽象的人間労働

直接的交換可能性

価値関係,交換関係

内的,内在的

外的対象性

対立,内的対立,外的対立

現象,現象する,現象形態,実現形態

捨象,捨象する,抽象,抽象する

「資本論を読む会」便り

No. 19・20号
2017.3.22

今年最初の例会から、新たな参加者がありました。議論がより活発になり一層充実した「読む会」になることを期待します。

さて、アメリカでトランプ新大統領が就任し2カ月が経ちます。TPPの脱退など保護主義を掲げていますが、どの程度のものになるのかはまだ分かりません。保護主義が必ずしも自国資本の利益となるとは限らないからです。

保護主義の対極は自由貿易です。保護主義や自由貿易を私たちはどう理解し評価したら良いのでしょうか。資本論でも言及されていますが、資本主義はどのように運動しどのように社会を変えていくか、そうした理解が不可欠ではないかと思えます。

※ 今号を19・20合併号とさせて頂き、1月と2月の「読む会」の報告をいたします。

※ 小見出し直後の丸ゴシック体は、本文やレジュメを要約したものです。本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落初めの数語と、段落番号を付けています(本文の字下げごとにカウント。大月書店 全集版資本論)。

★第3節 C 一般的価値形態

1着の上着	=	} 20エレのリンネル
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1クォーターの小麦	=	
2オンスの金	=	
1/2トンの鉄	=	
その他	=	

一 価値形態の変化した性格

【第1段落】 「いろいろな商品はそれぞれの価値を…」

一般的価値形態における価値表現の特徴

- (1) 単純である。
- (2) 統一的である。

すなわち、一般的である。

というのは、いろいろな商品の価値を一つの商品で表しているからです。

【第2段落】 「形態ⅠとⅡはどちらも、ただ、1商品の…」

形態Ⅰ(単純な価値形態)と形態Ⅱ(展開された価値形態)における価値表現の特徴

どちらも1商品の価値を、商品自身の使用価値(現物形態)とは違ったものとして表現していることです。

報告者は、第3段落、第4段落にそれぞれ両形態の特徴が記されているので、この段落は

なくとも良いのではないかと説明しました。

これに対してKさんから、第2段落は、第6段落で説明されている形態Ⅰ・Ⅱと形態Ⅲとの本質的な違いを示唆している段落であるとの指摘があり、確認されました。

【第3段落】 「第1の形態は、1着の上着=20エレのリンネル、…」

形態Ⅰ、すなわち単純で偶然的な価値形態における商品価値の表現は、

1着の上着=20エレのリンネル

10ポンドの茶 = $\frac{1}{2}$ トンの鉄

のように個々の商品によってその価値表現が違っており、上着の価値と茶の価値が、価値として同じものであることを表現しているようには見えません。つまり、価値として統一的な表現を持っていないということです。

段落後半の、この価値形態が現れる歴史段階について論議になり、結論的には、共同体内部で偶然的に余った採集・狩猟物が、共同体間で時折り交換されるような歴史段階を指しているとなりました。具体的に、原始時代ではといった意見や、縄文時代ではないか、という意見もだされました。

【第4段落】 「第2の形態は第1の形態よりも…」

冒頭の

第2の形態は第1の形態よりももっと完全に1商品の価値をその商品自身の使用価値から区別している。

の意味について質問がありました。

形態Ⅰでは、上着の価値は、別の1商品のみの使用価値で表現されていました。

それに対して、形態Ⅱでは、上着以外のすべての商品の使用価値で表現しています。

それゆえ、

商品価値の諸表現の無限の列の内に、商品価値はそれが現れる使用価値の特殊な形

態には無関係だということが示されている…。(Bの1 展開された価値形態 の第1段落)

とあるように、形態Ⅱは、商品の価値と使用価値が形態Ⅰより区別されていることを示しています。

次に、形態Ⅱは、諸商品の共通な価値表現を持っていないことが確認されました。

というのは、この形態では、諸商品の価値表現において相対的価値形態にある商品が等価形態から排除されています。そのため、諸商品の価値を表現している等価形態が共通な内容になっていないのです。

【第5段落】 「新たに得られた形態は、いまではその商品自身の…」

形態Ⅲ(一般的価値形態)では、「商品世界から分離された一つの同じ商品種類」つまりリンネルが、すべての商品の価値を表現しています。したがって、すべての商品は価値として同じものであることが表現されています。

このことは、どの商品も、自分自身の使用価値から区別するだけでなく、一切の使用価値から区別して、自分自身の価値を表現していることになります。価値は、すべての商品に共通なものとして表現されているといえます。

そして、形態Ⅲが初めて、現実には諸商品を互いに価値として関係させます。すなわち、形

態Ⅲは、諸商品を質的に同一で、量的に比較可能にし、かつ諸商品を交換価値として、価値の現象形態として価値を目に見える形で関係させます。

【第6段落】 「前のほうの2つの形態は、商品の価値を、…」

形態Ⅲにおける相対的価値形態の変化した姿の、質的考察のまとめ

形態Ⅰと形態Ⅱ

商品の価値を、ただ一つの異種の商品によってであれ(形態Ⅰ)その商品とは別の多くの商品によってではあれ(形態Ⅱ)、一つ一つの商品ごとに表現します。(20エレのリンネル=1着の上着、20エレのリンネル=10ポンドの茶など。)

両形態ともリンネルが、自分に一つの価値形態をあたえることは、リンネルの私事としての能動性であり、他の商品は等価物という受動的な役割をしているだけです。

形態Ⅲ(一般的価値形態)

リンネルで価値を表現するすべての商品は能動的に、しかも共同して自身の価値をリンネルで表現しています。したがって一般的価値形態は商品世界の共同の仕事になるのです。

ある商品が生まれながらにして一般的等価物になるわけではありません。すべての商品が、共同して、自分たちの価値を同じ等価物(リンネル)で表現することで、リンネルは一般的等価物になります。新たに現れるどの商品種類もリンネルによって価値を表さなければなりません。こうして、商品世界全体がリンネルによって価値を表現することになります。

すべての商品はリンネルによる価値表現以外の価値表現を持たず、諸商品の価値対象性は諸商品の全面的な社会的関係によってのみ表現されることになります。

諸商品の価値形態はただ社会的に認められた形態でなければならないということが、この一般的相対的価値形態においては明瞭に現われているのです。

ここまでの第19回(1月)の内容です。以下は第20回(2月)です。

【第7段落】 「リンネルに等しいものという形態では、…」

一般的価値形態は、すべての商品の価値量が比較され得る形態である

形態Ⅲ(一般的価値形態)においては、すべての商品は、量的に比較されうる価値量としても現れている。

例えば

10ポンドの茶=20エレのリンネル

40ポンドのコーヒー=20エレのリンネル

∴ 10ポンドの茶=40ポンドのコーヒー

というように。これはまた、価値実体=労働の量としても比較されうる。

形態Ⅲでは価値の量的側面が明瞭になっている、ということだと思います。

【第8段落】 「商品世界の一般的な相対的価値形態は、…」

- ・一般的な相対的価値形態は、商品世界から除外された等価物商品(リンネル)に、一般的等価物という性格を押しつける。
- ・リンネルの現物形態がこの世界の共通な価値姿態 → 他のすべての商品と直接交換可能。

- ・リンネルの物体形態は、いっさいの人間労働の $\left\{ \begin{array}{l} \text{目に見える化身} \\ \text{社会的な蛹} \end{array} \right.$ となる。
- ・リンネルを生産する私的労働(織布)
 - 一般的な社会的形態(他のすべての労働との同等性の形態)にある。
- ・一般的価値形態をなしている無数の等式
 - 織布を人間労働一般の一般的な現象形態にする。
- ・商品価値に対象化されている労働
 - 労働の具体的形態と有用的属性とが捨象されて、消極的に表わされているだけでない。
 - 商品価値に対象化されている労働自身の積極的な性質がはっきりと現われる。
- ・その、積極的な性質とは。
 - 商品価値に対象化されている労働は、いっさいの現実の労働が、それらに共通な人間労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元されたものである。

「社会的『蛹化』」の「蛹化」について議論になりました。蛹になったという意味ですが、最初、次のような対応があるとの説明がありました。

卵	単純な価値形態 (形態Ⅰ)
幼虫	展開された価値形態(形態Ⅱ)
蛹	一般的価値形態 (形態Ⅲ)
成虫	貨幣形態

しかし、形態ⅠやⅡについてどこかでそのようなことが書かれているわけではなく、このように言うと言い過ぎだろう、ということになりました。

一般的価値形態の次は貨幣形態ですが、これは価値形態の完成形です。金が貨幣となって登場するわけですが、形態Ⅲのリンネルとは姿・形がまるで違います。これらの例えとして形態Ⅲを蛹としたのだろう、という指摘があり、これで落ち着きました。

「消極的」と「積極的」についてすこし議論がありました。上記要約の後半部分です。

人間労働一般、あるいは、抽象の人間労働が、

「労働の具体的形態と有用的属性とが捨象されて、消極的に表わされている…」

というところです。ここでは、労働から具体的形態と有用的属性とが捨象された残りが、人間労働一般なので、その意味で「消極的」と言っていると思われます。

「積極的」の方はどうでしょうか。あらゆる商品が、ただ1種類の商品＝リンネルで価値を表現するので、これを「積極的」と言っているようです。

商品どうしのこの共同作業によって、「商品価値に対象化されている労働は、いっさいの現実の労働が、それらに共通な人間労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元」しているということなのでしょう。

【第9段落】 「諸労働生産物を無差別な人間労働の…」

一般的価値形態は、それ自身の構造によって次のことを示している。

一般的価値形態は商品世界の社会的表現である。

一般的価値形態は、次のことを示している。

商品世界の中では、労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっている。

ここでは「労働の独自の社会的性格」のイメージがなかなかつかめない、ということで議論になりました。

どの商品の生産も、直接には、私的に行われています。ですが実際には、社会的性格を持

たされます。というのは、他の商品と交換されなければならないからです。例えば、自動車メーカーが自社の自動車をたくさん倉庫に抱え込んでいたら倒産します。

したがって、商品を生産する労働は私的でありながら社会的性格を持たされることになります。このことを「労働の独自の社会的性質」と言っているのではないのでしょうか。

「商品世界」における労働の関係について、工場内の労働の関係と比較する説明がありました。ある工場のA課では部品Xを、B課では部品Yを、C課では部品XとYから製品Zを生産しているとします。この場合、A課もB課もそれぞれ部品XとYを商品として生産し、C課に売っているわけではありません。生産計画に従って、部品XやYが必要な数量を必要な期日までに生産し、それをC課で使うわけです。工場内という小さな社会ですが、各課で行う生産労働は、(工場内の)社会的労働です。ここは「商品世界」ではありません。

メモ不足で説明を正確に再現できないのですが、編集人はこのように理解しました。

二 相対的価値形態と等価形態との発展関係

【第1段落】 「相対的価値形態の発展の程度には…」

相対的価値形態の発展の程度には等価形態の発展の程度が対応

相対的価値形態の発展の程度

—対応・結果→ 等価形態の発展の程度

この対応は、次の第2段落で述べられています。

【第2段落】 「1商品の単純な、または個別的な相対的価値形態は、…」

相対的価値形態の発展と等価形態の発展の対応

形態Ⅰ 1商品の単純な、または個別的な相対的価値形態

他の1商品を個別的等価物にする。

形態Ⅱ 1商品の展開された相対的価値の形態（すべての他の商品での1商品の価値表現）

他の多数の商品を、いろいろに違った種類の特殊の等価物にする。

形態Ⅲ 一般的価値形態

ある特別な商品種類が一般的等価形態を与えられる。

（すべての他の商品がこの商品種類を自分たちの統一的な一般的な価値形態の材料にするから）

【第3段落】 「しかし、価値形態一般が発展するのと同じ程度で、ト…」

相対的価値形態と等価形態の対極性の発展

価値形態一般が発展するのと同じ程度で、相対的価値形態と等価形態との対立もまた発展する。

この対立の発展の内容は、次の段落以降で説明されます。3月の例会で検討しましょう。

※ 編集人の都合で、いろいろ検討したことや議論をうまくご紹介できませんでした。
申し訳ありません。以後、頑張ります

「資本論を読む会」便り

No. 21号
2017.4.14

今回も、新たな参加者をお迎えし、活発な議論が展開されました。
前回の「便り」(19・20合併号)では、2月の例会(第21回)で宿題となっていた問題について触れるのを忘れていました。3月の例会(第22回)は、最初にこの宿題について報告者から解答があり議論しました。
その後、今回のところに進み、「第3節のC 一般的価値形態」を終わりました。

◆第22回の内容

※ 編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではなく、編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。

小見出し直後の丸ゴシック体は、本文やレジュメを要約したものです。本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落初めの数語と、段落番号を付けています(本文の字下げごとにカウント。大月書店 全集版資本論)。

★第3節 C 一般的価値形態

1着の上着	=	} 20エレのリンネル
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1クォーターの小麦	=	
2オンスの金	=	
1/2トンの鉄	=	
その他	=	

2月例会(第21回)の宿題

宿題とは、「一 価値形態の変化した性格」の最後の段落の最後の1文

一般的価値形態は、この世界のなかでは労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっているということを明らかに示している…。

について、レジュメは、

…、一般的価値形態は、この世界(ブルジョア社会)のなかでは労働の一般的な人間的性格(具体的労働)が労働の独自の社会的性格(抽象的人間労働)となっているということを明らかに示している…。

となっているが、それでいいのか、というものでした。

これについて報告者から、「労働の一般的な人間的性格」とは抽象的人間労働のこと、「労働の独自の社会的性格」とは価値を形成すること、と説明がありました。

前回のレジュメとは逆になっていることとか、「独自の社会的性格」の「独自」とはどういうことか、など長い議論になりました。前回および今回の議論を踏まえてまとめると、次のようになるかと思います。

「この世界」

商品世界のことを指しています。1つ前の文の中に商品世界という語が出ており、文の続き具合からそう読めます。しかし、商品生産社会は商品世界を形成し、資本主義経済の社会はその発展形ですから、そのように理解してもあまり差し支えなさそうです。しかし、例えば資本主義社会に限定してしまうとまずいでしょう。資本主義以前の、例えば江戸時代以前の社会においても一般的等価形態はあったし、貨幣形態さえあったからです。

「労働の一般的な人間的性格」

労働の、抽象的人間労働という側面を指しています。

「労働の独自の社会的性格」

労働の社会的性格とは、いろいろな労働が統合されて生産物が作られることだという指摘がありました。例えば、工場内ではいろいろな有用労働が統合されて生産物を作っています。

ところが商品社会では、生産物は私的に生産されており、いろいろな有用労働は直接には関連させられていません。まず、生産物は商品として交換されます。次に、いろいろな労働によって作られたそれらの生産物から、新たな生産物が生産されます。このようにしていろいろな有用労働が統合されます。

商品交換が行なわれるということは、抽象的人間労働が生産物に価値という属性を生じさせているということです。あるいは、抽象的人間労働が価値として現象しています。このことを労働の**独自の社会的性格**と言っていると思われます。

二 相対的価値形態と等価形態との発展関係

今回は第3段落まで進みましたので、第1～3段落の復習の後、第4段落に入りました。

【第4段落】 「すでに第一の形態…」

形態Ⅰにおける対立

形態Ⅰ 20エレのリンネル = 1着の上着

- ・相対的価値形態と等価形態の対立を含む
- ・この対立は固定化されていない。

逆の関係

1着の上着 = 20エレのリンネル

も成り立ち、この場合、1着の上着が相対的価値形態、20エレのリンネルが等価形態と、逆になっている。

対立というのは、2商品の、相対的価値形態と等価形態の役割分担のことかと質問がありました。報告者から、20エレのリンネル = 1着の上着 という式のなかで、相対的価値形態にあるリンネルは、同時に等価形態になることはできないということだと説明がありました。

【第5段落】 「形態Ⅱでも、やはりただ一つ一つの商品種類が…」

形態Ⅱにおける対立

形態Ⅱ 20エレのリンネル = 1着の上着

= 10ポンドの茶
= 40ポンドのコーヒー
.....

- ・リンネルは相対的価値形態にある。
- ・等号の左右を入れ換えることはできない。
 - ∴ 異なる形態(形態Ⅲ)になってしまう。

ここでは特に議論はありませんでしたが、対立が形態Ⅰより少し固定化されています。

【第6段落】 「このあとのほうの形態、すなわち形態Ⅲが…」

形態Ⅲ(一般的価値形態)における対立

形態Ⅲ (表式は 1ページの「★第3節 C 一般的価値形態」を参照)

- ・リンネル以外の商品は、一般的等価形態から排除されている。
- ・相対的価値形態 と 等価形態 の対立
リンネル以外の商品 と リンネル
の形になって現れている。
- ・一般的等価形態にあるリンネルは、他の全商品から排除された例外的存在
- ・リンネルは、他の全ての商品との直接的な交換可能性の形態にある。
 - ∴ 他の全ての商品が一般的等価形態から排除されているから。

リンネルは、他の全ての商品に対して常に等価形態にあるので、対立は固定化しています。

この段落では特に議論はありませんでしたが、この相対的価値形態と等価形態の対立の固定化は重要だと思います。形態Ⅲは次の貨幣形態に発展して価値形態が完成する訳ですが、そこでは、貨幣を除く全商品と貨幣の対立が固定されていることになるからです。

【第7段落】 「反対に、一般的等価物の役割を演ずる商品は、…」

一般的等価形態にある商品

- ・一般的等価形態にある商品リンネルは、一般的相対的価値形態から排除されている。
- ・一般的等価形態にある商品リンネルの相対的価値表現
→ 形態Ⅲを逆にする。すなわち形態Ⅱとなる。

一般的等価形態にあるリンネルの価値表現は、一般的価値形態では不可能というのは当然です。20エレリンネル=20エレリンネル と言ってみても、何も表現していないからです。自分の体重=自分の体重 では、太ったのか痩せたのか分かりません。

この段落についてどなたか質問がありましたが、メモが不十分で思い出せません。すみません。

リンネルの相対的価値表現は形態Ⅱになるという記述がありますが、「あーそうなんだ」と思いました。形態Ⅲが貨幣形態に発展すると、そこでは貨幣の相対的価値表現は形態Ⅱになることを意味するからです。但し、これが特別重要なことかどうかは編集人にはよく分かりません。

三 相対的価値形態と等価形態との発展関係

【第1段落】 「一般的等価形態は価値一般の一つの形態である。…」

一般的等価形態にある商品は、特別な、例外的な商品

- ・ある商品が一般的等価形態にある ← 他の全ての商品から等価物として排除される
- ・この排除

最初は、時と所によっていろいろな商品に。

最終的に一つの商品種類に固定。

- ・こうして、商品世界の統一的な相対的価値形態は、客観的に一つの固定性と一般的な社会的妥当性を得る。

社会的妥当性とはどういう意味かとの質問には、全ての商品によって認められることだとの解答がありました。

また、一つの商品種類に固定されると、一般的等価形態という役割が、その商品の性質・その商品の自然的属性のように見えてくる、という指摘もありました。

【第2段落】 「そこで、その現物形態に等価形態が社会的に合生する…」

貨幣

- ・その現物形態に、等価形態が社会的に合生する特殊な商品種類は、貨幣商品となる。
そして、貨幣として機能する。
- ・一般的等価物の役割を担わされることがその商品の社会的機能となる。
- ・その商品だけが、一般的等価物の役割を担う(社会的独占)。
- ・金が、この地位を歴史的に勝ち取った。

合生とは、広辞苑には載っていない語ですが、結合した・もつれた・癒合した、といった意味です。成長して何かになるという感じで、時間の経過を含むようです。

貨幣の一般的等価物という機能・役割は、社会的に与えられた(他の全ての商品によって押しつけられた・与えられた)機能であって、貨幣それ自身から生じた機能ではないということです。

金が最終的に貨幣となったのですが、歴史を遡ると銀であったり銅であったりしました。さらには、地域によっては家畜が貨幣の役割をしていた時代があったということです。少し議論になりましたが、どんな商品が貨幣に適しているのかについては第2章で取り扱われています。



「資本論を読む会」便り

No. 22号
2017.5.15

4月は年度始めとあって色々なイベントも多く、都合のつかなかった方もありました。逆に、今月は日程が取れたとて、久しぶりに参加された方もありました。今回読んだところは第1章第3節の最後の2ページですが、時間いっぱい議論して、この節を終わりました。第3節に入ったのは2015年10月ですから、およそ1年半もの時間をかけたことになります。最大の難所を過ぎたので今後は軽快に進むでしょうか。

◆第23回の内容

※ 編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではなく、編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。

小見出し直後の丸ゴシック体は、本文やレジュメを要約したものです。本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落初めの数語と、段落番号を付けています(本文の字下げごとにカウント。大月書店 全集版資本論)。

前回の復習

前回の簡単な復習から始まりましたが、関連して大略次のような質問がありました。

労働生産物の交換が始まって、すなわち商品が出現し、商品交換が発展して貨幣が生まれた。第3節はそういう歴史の流れについてたどってきたと理解して良いか？

というものでした。これについて、

- ・ 単に歴史的なものとしてのみ見るのは正しくない。
- ・ 現代の商品の論理的な分析であって、単純な価値形態から貨幣形態への発展は、論理的な展開・発展である。
- ・ この論理的な発展が、歴史的にも出現したと見るべきである。

といった意見が出され、質問者も了解されました。

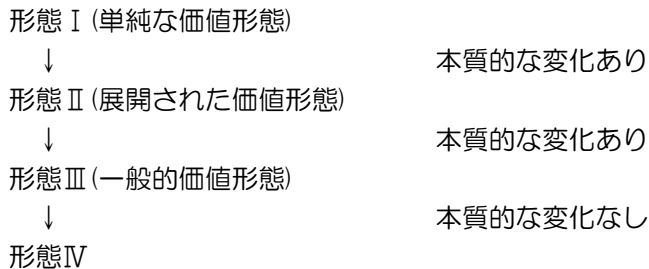
なお、議論の中で、宇宙創生後のビッグバンでクォークなどいろいろな素粒子が生まれてきた例が持ち出されました。現存宇宙での素粒子の振る舞いが宇宙の歴史の中で展開してきたということで、ちょっと難しかったのですが興味深い話でした。

第1編 第1章 第3節 D 貨幣形態

20エレのリンネル	=	} 2 オンスの金
1着の上着	=	
10ポンドの茶	=	
・	=	
・	=	
X量の商品	=	

【第1段落】 「形態Ⅰから形態Ⅱへの、または形態Ⅱから形態Ⅲへの…」

一般的等価形態から貨幣形態への移行



形態ⅢからⅣへの移行で「前進」したこと

一般的等価形態が持っている直接的な一般的な交換可能性の形態が
社会的な慣習によって、商品金の現物形態に最終的に癒着(「合生」)

「合生」については「資本論を読む会」便り前号をご覧ください。

さて、ここでは、貨幣形態(形態Ⅳ)は一般的価値形態(形態Ⅲ)における一般的等価形態の商品20エレのリンネルを金に取り替えられた形態であって、価値形態として本質的な変化はない、ということが重要です。つまり価値の本質から、論理的に、一般的等価物は金でなければならないと導かれるわけではないということです。

金が、その使用価値の量によって価値を表すものとして選ばれたのは社会的慣習で、歴史的所産だということです。

ここで、形態Ⅰ→形態Ⅲも歴史的要素ではないかという質問がありました。これは、歴史的に、論理的な発展があったということで了解されました。

【第2段落】 「金が他の商品に貨幣として相対するのは、…」

金が貨幣となった次第

- ・金は突然、諸商品と対峙し貨幣となったのではない。
- ・金は、他の諸商品に、商品として相対していた。
単純な価値形態では、他の商品と同様に、個別的な等価物として現れた。
展開された価値形態では、他の商品と同様に、特殊な等価物として現れた。
- ・金は、次第に一般的等価物として機能するようになった。(範囲に違いはあっても)
- ・金が、一般的等価物としての機能を独占するようになった。
金は貨幣商品となり、一般的等価形態は貨幣形態に転化した。

この段落は、まあ、書いてある通りと思いますが、例会での議論は、現代の貨幣は何かという方向に発展しました。というのは、われわれの周囲に金貨幣を見ることがないからです。

例えば、江戸時代には金貨幣が使われていました。

明治維新後、金本位制が導入され、兌換日銀券が使われるようになりました。日銀券は紙ですが金の代用物ということです。1897年の貨幣法では 1円＝金750mg(0.2匁)でした。

2つの世界戦争を経るなかで、金兌換が停止され、金本位制が崩壊しました。しかし、金1オ

ンス($\approx 31.103 \text{ g}$)=35ドル と決められ、IMF(国際通貨基金)体制の下、1ドル=360円 のように固定された為替レートを介して、金と結びついていました。

しかし、1971年アメリカが金・ドル交換を停止し、その後、変動為替相場制となり、金が基準ではなくなり、現在に至ります。

という訳で、現代では貨幣形態はどこにあるのかが問題になります。ですが、「読む会」としては今これを研究する段階ではなく、資本論を読み進めて貨幣について深い理解を獲得していくことが肝要かと思います。

あと、ビットコインとは何かという疑問も出されましたが、貨幣の支払い手段としての機能に基づくものだという指摘で終わりました。

こうした貨幣の機能については、第3章 貨幣または商品流通 で学びます。

※「相対する」

第2節以降よく出てきますが、「あいたいする」が正しい読みだとの指摘がありました。「相対的…」というのが多く出てきたので、つい「そうたいする」と読んでしまいがちですが、「そうたいする」という動詞は無いようです。以下、広辞苑から。

あいたい【相対】 名詞

①当事者同士が直接に会って事を行うこと。②双方が納得すること。合意。③対等であること。

あいたいする【相対する】 自サ変

互いに向かい合う。また、対立し合う。例: 長方形の相対する二辺。相対する陣営。

そうたい【相対】 名詞

①向きあっていること。向かいあうこと。②相互に関係を有すること。対立すること。③[哲](the relative) 他に対して在るもの。他との関係において在るもの。一定の関係、一定の状況においてだけ妥当するもの。自己同一性をもたないもの。相対者。絶対。

【第3段落】 「すでに貨幣商品として機能している商品での、…」

一般的な相対的価値形態の価格形態への移行

貨幣商品金によるリンネルの単純な相対的価値表現は次のようになります。

20エレのリンネル=2オンスの金

あるいは、2オンスの金の貨幣名が2ポンド・スターリングであれば

20エレのリンネル=2ポンド・スターリング

となり、これがリンネルの価格形態となることを明らかにしています。

ポンドとは円と同じようなものかという質問がありました。どちらも貨幣の単位名で、もともとは貨幣商品の重さの単位です。勿も話題になりました。

円

1 匁^{かん}=1/1000 貫^{かん} $\approx 3750 \text{ mg}$

1871年 金1円=金0.4匁($\approx 1500 \text{ mg}$)。1897年 金1円=金0.2匁($\approx 750 \text{ mg}$)

ポンド(ポンド・スターリングが正式名)

8世紀 重量1ポンドの銀から銀貨240枚を铸造。

1663年 ギニー金貨。価値を1ポンドとした。

1817年 金1オンス＝3ポンド17シリング10ペンス半 と決めた。
(1ポンド＝20シリング, 1シリング＝12ペンス)

【第4段落】 「貨幣形態の概念における困難は、…」

単純な商品形態は貨幣形態の萌芽

貨幣形態の概念的把握上の困難は、一般的価値形態(形態Ⅲ)そのものの理解に限定される
一般的価値形態の理解は展開された価値形態(形態Ⅱ)の理解に帰着する
展開された価値形態の理解は単純な価値形態(形態Ⅰ)の理解に帰着する。

Aの一の冒頭の

すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆえ、この価値形態の分析には特有の困難がある。
に符合している。

「一般的価値形態そのものの理解に限定」されるとはどういうことかと、質問がありました。主語が「貨幣形態の概念における困難」ですから、一般的価値形態の概念が理解できたなら貨幣形態の概念は理解できるだろう、ということです。一般的価値形態での「20エレのリンネル」が、「2オンスの金」になっただけですから。

それで、貨幣形態の理解は、形態Ⅲ→Ⅱ→Ⅰと遡って、単純な価値形態 $A=B$ に貨幣形態の芽があるというわけです。

例会で議論にはなりませんでしたでしたが、段落の最後は「単純な商品形態は貨幣形態の萌芽」と言っており「単純な価値形態」とは言っていない。

これについて、10年ほど前に堺市立南図書館で行なっていた「資本論を読む会」の議論では、「単純な商品形態」とは商品形態の未発達の状態、それゆえ単純な価値形態でもあったということだろう、で終わったことを補足しておきます。なお、商品形態とは、労働生産物が商品として世の中に現れることを商品形態を持つと言います。

その他

報告者から、これまで読んできたところに出てきた言葉・語句の説明に挑戦するという話がありました。用語集を作る、ということだと思います。例として、価値、価値物などが上げられました。

これまでも例会の議論の中で、「価値って何でしたっけ？」といった質問が時折出ていますので、用語集のようなものが手元にあると、資本論を読み進める上で便利かも知れません。

あと、「貨幣形態の概念における困難」とあるが、概念の把握とか概念の理解とは？ といった発言がありましたが、編集人のメモ不十分で、どんな議論になったか思い出せません。悪しからずご了解ください。概念、概念の把握、概念の理解、理解、内的必然性、発展、運動、変化、などの語も用語集に入れろ、といった話だったのでしょうか。

「資本論を読む会」便り

No. 23号
2017.6.10

今回も新しい参加者がありました。今年に入って毎回のようメンバーが増え、主催者としては嬉しい限りです。

さて、本紙前号で「最大の難所を過ぎたので今後は軽快に進むでしょうか。」と書いたのですが、なかなかそうは行かないようです。新しい節に入ったのですが、わずか4段落しか進みませんでした。同じ意味だと思われる語句の微妙な違いとか、誤解しそうな表現とか、まだまだ道は険しそうです。

今回はいつもと違って、「便り」編集人が報告を行ないました。

◆第24回の内容

※ 編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではなく、編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。

小見出し直後の丸ゴシック体は、本文やレジュメを要約したものです。本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、ページ番号、初めの数語を付けています(本文の字下げごとにカウント。大月書店 全集版資本論)。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密

標題の「物神的」について。全集版資本論(岡崎訳)では「呪物的」です。「物神的」のほが一般的なようなので、以下、これを使います。両者ほぼ同義ですが、物神とは「呪力をもつとして崇拝される物や動物。また、偶像」、呪物とは「(fetish) 呪術的な効果をもつとされる物。呪具・呪符・護符などの類」(広辞苑)のことで、少しニュアンスが違います。

あとで出てくる、「物神崇拝」と「呪物崇拝」は同義語とされています(広辞苑)。

【第1段落】(96) 「商品は、一見、自明な平凡なものに見える。…」

商品は自明・平凡に見えて、理解するのが困難で込み入った性格をもつ。

商品は、一見、自明な、平凡なものに見える。しかし、第1節～第3節の分析で見たように、商品の性格はややこしく、やっかいなものである。

労働生産物の使用価値は、

感覚的にとらえることができ、神秘的なところはない。

他方、労働生産物が商品として出現すると、

感覚的にして……使用価値として、物的形態あるいは素材として見たまま。

超感覚的な……感覚的には(人間の5感では)捉えられない。

ものとして現れる。

この段落の要点は上記の通りです。商品は、分析をはじめるとすぐにヘンテコなものだとわかります。これを「超感覚的」と言っているわけですが、次の段落では「神秘的」と言っ

ているという指摘がありました。

この段落が分かりにくいのは、「超感覚的」の説明で使われている例えです。

例えば商品の込み入った性格を「形而上学的小理屈……で、いっぱい」と表現しています。ここでは、難しい論理・抽象的な議論でいっぱい、くらいの意味でしょう。

なお、形而上学とは「超感覚的な世界を真実在と考え、これを純粋な思考によって認識しようとする学問」(岩波 哲学小辞典)のことだそうです(論者によって違うらしい。この説明はアリストテレスの形而上学)。小難しい議論がいっぱいなのでしょう。

机が「他のすべての商品に対して頭で立つ」という例えはどういうことか、と質問がありました。これに対し、商品の性格は、頭で考えねばならない、思弁的・抽象的・観念的に考えねばならない、ということを表していると言言がありました。「超感覚的」の比喩的表現で、机が「足で立つ」が「感覚的」の比喩になっていることと、対応しているのではないかという指摘もありました。

あと、この机が「勝手に踊りだす」例えに関しての注・訳注も検討しましたが、省略します。

【第2段落】(96) 「だから、商品の神秘的性格は、その使用価値から…」

商品の神秘的性格は、使用価値にも、価値規定の内容にも由来しない。

商品の神秘的性格は、

A 使用価値に由来しない。

B 価値規定の内容にも由来しない。価値規定の内容は、あらゆる社会に存する。

1) すべての労働は、人間の身体的活動である。

2) どんな生産物も一定の労働の量を必要とする。

3) 互いのための労働は、社会的な形態を持つ。

この段落のポイントは、価値規定の内容は商品を神秘的なものにしない、ということです。問題は、「価値規定の内容」です。この言い方ですと、価値規定そのもの、第1節第12段落～第16段落あたりの内容、のようにも思えます。ですが、どうも違うようです。と言うのは、この段落の「第1に…。第2に…。最後に…。」という説明は、価値規定ではないからです。また次の第3段落で価値規定が説明されています。

したがって、この「第1に…。第2に…。最後に…。」として説明されている事柄が「価値規定の内容」になります(上記要約のB)。

他方、「価値規定」とはどういうものだったのでしょうか。次のようにまとめられるのではないかと思います(第1節の第11～16段落)。

商品の交換関係、交換価値のうちに自らを表している共通物が商品の価値

価値 生産に必要な社会的労働によって規定される。

抽象的人間労働、同じ人間労働の凝固

価値の大きさ 社会的平均労働時間、社会的必要労働時間

【第3段落】(97) 「それでは、労働生産物が商品形態をとるとき、…」

商品の謎のような性格はこの形態(商品形態)自身から生まれる。

労働生産物が商品形態をとると謎のような性格が生じるのは、その形態そのものから。

〈商品〉

- | | |
|--------------------|------------------------|
| 1) 人間労働の同等性 | → 同等な価値対象性という物的形態を受取る |
| 2) 同等な人間労働力支出の継続時間 | → 価値量という形態を受取る |
| 3) 生産者たちの社会的諸関係 | → 労働生産物の社会的関係という形態を受取る |

「商品が謎のような性格なのは商品だから。」と言っているようで、頭の中が???だらけになりそうな、謎のような説明です！

それはともかく、「労働生産物が商品形態をとる」ということは、ここで説明している3つの形態を受取ることです。労働生産物が、他人のための使用価値として・交換を目的として・社会的分業によって生産されているので、これらの形態を受取ります。

この段落は第2段落の繰返しではないかという意見がありましたが、位置づけとしては第2段落を受けて次の第4段落への橋渡しになっている、という意見が出されました。

例会で議論はなかったと思いますが、この段落の最後の「生産者たちの労働の前述の社会的規定がその中で実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。」という文は分かりにくいところです。次のようになりませんか。

【主語】 彼ら(=生産者たち)の諸関係は、

【修飾句】 生産者たちの労働の前述の社会的規定がその(関係の)中で実証される

【述語】 いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。

そして、この文の中の「前述の社会的規定」は、第2段落の「最後に」以下の部分

「人間がなにかの仕方で相互のために労働するようになれば、彼らの労働もまた社会的形態をもつことになる」

を指しています。

【第4段落】(97) 「だから、商品形態の秘密はただ単に…」

商品形態の謎のような性格の秘密

(1) 商品形態の秘密(神秘性)は次のうちにある。

商品形態は人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を

- | | |
|----------------------------|------|
| 1) 労働生産物そのものの対象的性格として反映させる | (価値) |
| 2) 労働生産物の社会的な自然属性として反映させる | (価値) |

総労働に対する生産者たちの社会的関係をも

- | | |
|------------------------------------|------|
| 3) 労働生産物の社会的関係(生産者たちの外に存在)として反映させる | (交換) |
|------------------------------------|------|

(2) このような置き換え(入れ替わり)によって、

労働生産物は { 商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物になり、
社会的な物になる

「資本論を読む会」便り

No. 24
2017.7.9

商品の物神性のところの2回目です。今回も「便り」編集人が報告を行ないました。本文を繰返し読んでいて、主語と述語が遠く離れていたり、修飾語(句)が修飾する対象の語や句がどれか分かりにくい、と強く感じました。今まで読んだところは分かりやすかったということではなく、レジュメ作成を意識していたからだと思います。さりとて翻訳が分かりにくければ原書で、という訳にもゆきません。こっちはもっと分かりませんから!!

◆第25回の内容

※ 編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではなく、議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。

小見出し直後のゴシック体は当該段落の要点、丸ゴシック体は本文やレジュメの要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店 全集版 による。段落は本文の字下げごとにカウント)。

参照ページ番号を原著ページで表すことにしました。テキストによってページ番号は異なりますが、大抵原著ページ番号も記されているので、その方が便利だというご指摘がありましたので。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密

※ 物神的: 全集版資本論(岡崎訳)では「呪物的」です。「物神的」のほうが一般的なようです。

【前回の復習】

最初、「便り」第23号を使って前回読んだ第1～4段落を簡単に復習しましたが、この第4節全体の、第1章の中での位置づけが議論になりました。

第1～3節では、商品が前提にされています。商品はわれわれの目の前に、そこら中に溢れています。この商品をつかまえて、それがどんな性質・属性を持っているかが分析されました。すなわち

第1節 商品は使用価値と価値を持つ。価値の実体は抽象的人間労働

第2節 商品に表された労働の二重性

第3節 商品の価値が別商品によって表現される仕組みとその発展
ということでした。

それに対し、第4節 商品の物神的性格とその秘密 では、

労働生産物はどうのような条件のもとで商品となるのか

が課題です。商品が物神的性格を持つのはそれが商品だからです。したがって、どのような社会的な条件が労働生産物を商品にし、それらの条件がどのように商品の性格に反映するのか、が問題になります。

この節を読み進める上で、こうした事を念頭に置いて読めば、理解が深まるのではないかと思います。

【第5段落】(87) このような、商品世界の呪物的性格は、....

商品世界の物神的性格は、前の分析がすでに示したように、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずる

短い段落ですので、要点といってもほぼ原文通りです。

まず、「前の分析」とは、この節の第1～4段落を指していると思われます。そこでは、労働の社会的性格が、生産物の対象的性格、生産物の(社会的な自然)属性として反映する。生産者たちの社会的関係が、生産物の社会的関係として反映する。とのべられていました。この「社会的性格」がこれから明らかにされていくということのようです。

【第6段落】(87) およそ使用対象が商品になるのは、...

使用対象が商品になるのは、互いに独立して営まれる私的労働の生産物だからである。

私的労働の独自の社会的性格は、商品の交換においてはじめて現われる。

(1) 使用対象が商品になるのは、互いに独立して営まれる私的労働の生産物だからである。

(2) 個々の私的労働の全体(複合体)は社会的総労働をなす。

(3) 生産者の私的労働の独自の社会的性格は商品の交換においてはじめて現われる。

∴ 生産者は、生産物の交換を通じてはじめて社会的に接触するから。

(4) 言い換えると、私的労働は、

交換によって、労働生産物がおかれる関係

労働生産物を介して生産者たちがおかれる関係

によって、はじめて実際に、社会的総労働の諸環として実証される。

(5) 生産者たちにとって、彼らの私的労働の社会的関係は、あるがままのものとして現われる。

すなわち、個人の物的な関係として、物の社会的な関係として現われる。

諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではない。

上記(3)がこの段落のポイントのようです。

私的労働の全体が社会的総労働をなし、社会的に関連し合っています。ですが、生産物ができただけでは関連性は、まだ現実のものではありません。実際に交換が行なわれることによってはじめて現実のものとなります。関連性は事後的に証明される、と表現された方もいました。

この段落でマルクスが言いたいことは、人間の関係(私的労働の関係)が商品の関係として現われる、見えてくる、ということかと疑問が出されました。

「現われる」は良いですが、「見えてくる」というのはやや不正確かと思われます。人間の関係が商品の関係として現われていることは、商品进行分析してはじめて分かることです。生産者にとっては(この社会の人間には)、商品と商品の関係が見えるだけです。それが「あるがままのものとして現われる」ということです(要約の(5))。

第1～4段落で、商品の歴史的な性格、商品の物神的性格について述べられたが、その原因をこの段落で言っている、という指摘もありました。

「私的労働の独自の社会的性格」の「独自の」とはどういうことかという質問に対し、他の社会と比べてということだ、という発言がありました。他の社会との比較は、少し先の段落で出てきますが、中世の農奴の労働の性格は、現代の労働の性格とは異なります。そういう比較で「独自の」と言っています。

【第7段落】(87-88) 労働生産物はその交換の内部においてはじめて、...

労働生産物が交換の中で価値対象性を受取る条件

- (1) 労働生産物は、交換の中で、はじめて、価値対象性(使用対象性と区別された)を得る。
この有用物と価値物への分裂は、交換が十分な広がりや重要性をもつようになって、はじめて実証される。
- (2) この瞬間から、私的労働は二重の社会的性格を得る。
 - 1) 私的労働は、一定の有用労働として一定の社会的欲望を充足させる。
社会的分業(自然発生的)の諸環として実証する
 - 2) 私的労働(有用労働)が、他のすべての有用な私的労働と同等である。
抽象的人間労働としてもっている共通な性格への還元(約元)されたということ。
- (3) 私的労働の二重の社会的性格の、私的生産者の頭脳への反映
→ 実際の生産物交換であらわれる諸形態でのみ反映
私的労働の社会的に有用な性格 → 労働生産物は他人のために有用でなければならぬ
異種労働の同等性という社会的性格 → 異なる有用物が、共通な価値性格を持つ

「有用物と価値物への分裂」について質問があり議論になりました。「価値物」という語はこれまでも出てきましたが、ここではどういう意味で使われているかが焦点です。

労働生産物が交換目的で生産され交換の場に現われるとき、その労働生産物は生産者にとっての使用価値(有用物)ではありません。では何ものなのかというと、交換可能なものとして登場しています。このことを「価値物」と言っていると思われます。レジュメでは次のような例をあげています。

例：農家は、収穫した米を、一部は自家用、残りを出荷用にする。

自家用が有用物、出荷用が価値物、というような意味と考えられる。

また、「価値物」に関して、バイキングの交易の話が紹介されましたが、大変分かりやすい説明でした。大略、次のような話だったと思います。

北欧ノルウェーのバイキングが、極寒の不毛の地で一大勢力を築き、さまざまなところに

出かけて行くようになったのは、干し鰯^{タラ}の製法を発明したことによるそうです。

干し鰯そのものは、ある時期に大量に取れる鰯を、不漁期の備えとして利用するのが目的で、当初はその限りでは一つの「有用物」に過ぎません。

干し鰯は長期保存が可能です。それを他の多くの隣接民族が欲しがり、彼らが持っているものと交換できるということをバイキングは知ると、大量の干し鰯を交換を目的に生産するようになり、それを持って大航海をし色々な地域で小麦や絹など彼らが必要とするさまざまなものと交換するようになっていったということです。それが彼らをして大航海に乗り出させた動機であり、原動力だったというわけです。

こうして、干し鰯は単なる保存食としての「有用物」から、「交換手段」という新たな対象性を獲得した訳です。干し鰯は単なる「有用物」という対象性から、それとは区別された、その対象性から分離した「交換手段」という新たな対象性を獲得したのです。

これがすなわち、ここでマルクスが述べている「価値物」だと思われます。

この段落か1つ前の段落のところで、「人間労働」の定義というか、人間が労働するということはどういうことか、あるいは、人間は彼らの生活をどのように支えあっているか、という質問がありました。

ここで扱われている労働は、人間がその生活を営む上で必要な物を作る労働、衣食住その他に必要な物を作る、そういう労働です。資本主義社会は、この人間労働の関係が、物と物との関係として現われる、そういう社会なのだという指摘もありました。

質問者からは、引き続いて、「自分には障害があって働くことができないし、手に職もない。どうしても、障害者の生活保障とか、障害者運動などを考えてしまう。障害者の労働はこの社会でどういう意味を持っているのだろうか？」と問題提起がありました。

これに対して、資本主義における労働は、労働力の購入とその使用という形で行なわれるため、労働力商品たりうるかどうかが問題とされる、という指摘がありました。それを受けて、資本主義社会では、豊かな労働を実現できていない、とも言われました。「豊かな労働」とは、各人はその能力に応じて働き必要に応じて(労働生産物を)受取る、という意味かと思われます。そんなことが可能なのかと思われる方もおられるかも知れません。

あと別の障害者の方は、資本主義社会のなかで私たち障害者はどう生きていくか・働いていくかは、困難だが重要な問題、と発言されました。

資本主義社会における労働の性格、労働がそうした性格を持つに至る要因・仕組みは、資本論で説明されています。これらの問題も念頭において、資本論を読み進めて行きたいと思っています。

「資本論を読む会」便り

No. 25
2017.8.16

第26回は商品の物神性のところの3回目でした。梅雨明け直前の蒸し暑い中、常連の方々が全員参加され、いつもの会場が少し手狭に感じられました。今回、わずか2段落しか進みませんでしたが、その分、中身は濃かったかと思えます。

◆第26回の内容

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。小見出し直後のゴシック体は当該段落の要点、丸ゴシック体は本文やレジュメの要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店 全集版 による。段落は本文の字下げごとに数える)。文中の[第1文]等の「文」は、句点(.)で区切られた文章の要素です。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密

※ 物神的: 全集版資本論(岡崎訳)では「呪物的」です。「物神的」のほうが一般的なようです。

【前回の復習】

司会のほうから前回のまとめがなされ、今回のところに進みました。

【第8段落】(88) だから、人間がかれらの労働生産物を互いに価値として…

互いに独立な私的労働による生産物は価値性格を持つ。

- (1) 異種の労働生産物を、交換において、価値として等しいとすることで、異なる労働を人間労働として等しいとする(そうとは知らずに)。 [第1～3文]
- (2) それゆえ価値の正体が分からなくなる。 [第4～7文]
- (3) 価値の秘密が解明されても、労働の社会的関係は相変わらず物と物の関係として現われている。 [第8文]
- (4) ・互いに独立な私的労働
人間労働としての同等性が → 労働生産物の価値性格の形態をとる。
 - ・これは、商品生産にだけあてはまる。
 - ・商品生産の諸関係の中に囚われていると、労働生産物の価値性格が永遠のものと映る。

[第9文]

段落冒頭の「だから」は何を指しているかが議論になりました。

「だから」は、具体的には第7段落の最後を指しています。そこでは、

私的労働の二重の社会的性格は、私的生産者の頭脳に対して、実際の生産物交換であらわれる諸形態でのみ反映する。つまり、

私的労働の社会的な有用性は → 労働生産物は他人のための有用物

異種労働の同等性は → 労働生産物は共通な価値性格を持つ
のように私的生産者には映る。

と述べられています。「だから」、私的生産者は、異種の労働生産物を交換において価値として等しいとしているだけであり、そうとは知らずに異種労働を人間労働として等しいとしている、ということです。

議論の中で、価値を値打ち、価値物を値打ち物と言ったりすることがありました。資本論の中では、価値はきちんと概念規定された上で使われています(第1章第1節参照)。言い換えた本人に誤解がなくとも、議論の中で誤解を生まないように、慎重にすべきでしょう。

同じ重さなら金のほうが鉄より値打ちがある、と言う場合の「値打ち」は価値を意味しています。しかし、この商品は値打ちがある、と言う場合はどうでしょうか。他と同じ価格だが性能が良いとか、同じ性能だが他より安いとか、そういう商品を指すわけですが、この場合は性能したがって使用価値を表しています。

価値のほうも、概念規定されているとはいえ、日常語を使っているので、気を付けないと日常語の意味に惑わされます(次の段落のところでも少し議論になりました)。

価値の理解に関して、労働生産物の交換が発展して(いつでもどこでも交換が行なわれるようになって)労働生産物に価値という性格が現われるという指摘や、価値という性格が現われることは労働生産物が社会的生産物となったことを意味するなどの発言がありました。

本文の「労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかないという後世の科学的発見」はマルクスか、と質問がありました。ペティからリカードに至る古典派経済学者たちということです。(参考: 第1章第1節の注9)

要約(4)の最後の行について、本文には「科学によって空気がその諸要素に分解されてもなお空気形態は一つの物理的な物体形態として存続しているようなものである。」という例えがあります。この例えは適切かという問題提起がありましたが、どう思われますか？

同じく要約(4)の最後の行ですが、「労働生産物の価値性格が永遠のものと映る」について。

現代の資本主義経済はいろいろな問題が噴出し、行詰まっているように見えます。それを解決しようとする、オルタナティブ経済学とか贈与経済学とかを耳にします。インターネットで検索して見つけたいくつかの紹介文を見る限り、商品経済を(つまり「労働生産物の価値性格は永遠のもの」と)前提しているように見受けられます(オルタナティブと言ってる割には)。(贈与経済学については当「資本論を読む会」でも、以前、話題になりました。)

【第9段落】(89) 生産物交換者がまず初めに實際上関心をよせるものは…。 (注)28

生産物の交換比率が固定化し、価値量として現われることで、生産物の価値性格が固定する。労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に潜む。

(1) 生産物の交換比率 → ある程度慣習的に固定 → 生産物自身の性質から生じると見え出す。

例: 1トンの鉄が2オンスの金と等価値なのは鉄自身の性質

価値量が交換の実際の場面に現われることで、労働生産物の価値性格が固定する。

(労働生産物の価値性格が全面的に現れる) [第1～4文]

(2) 価値量の変動……交換者の意志・予知・行為から独立

(生産物の交換比率は、生産者の意志の外で決まる) [第5～6文]

(3)・「独立し、社会的分業の諸環をなし、全面的に相互依存する、私的労働が、

↓ 労働生産物の、偶然的で絶えず変動する交換割合を通じて、

↓ 生産が、社会的に必要な労働時間に規制される。自然法則のように。(注28)

社会が要求する限度に絶えず還元される。」

という科学的認識が生まれるまでには、十分に発展した商品生産が必要であった。

・労働時間による価値量の規定……相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠れている。

[第7～8文]

(4) 労働時間による価値量の規定の発見は、労働生産物の価値量の単に偶然的な規定という外観を解消させるが、その物的な形態を解消させない。 [第9文]

交換比率の固定化ということで、玉子の価格が話題になりました。何年間も価格がほぼ一定だというわけです(“物価の優等生”)。同様なものとして、昔は塩せんべいが4枚で5円だったとか(どのくらい昔?), あんパンは今でも安いとか、いろいろ飛び出してきました。しかし、「当時は当時」という声もあったように、この段落で言う交換比率の固定化とは少し事情が異なると思われます。

まず、この議論では円との“交換比率”になっています。玉子が物価の優等生と言われるのは、全般的な物価上昇、いわゆる“貨幣価値”が下がる中で、価格があまり変わらなかったからです。こうした状況で玉子の価格が変わらないのは、玉子生産の生産力が上昇し玉子の価値が減少したことの反映ではないかと思います。

それで、交換比率の固定化ですが、ここではモストの「資本論入門」からの引用を書いておくことにします。この引用は、かつて堺市南図書館で行なわれた「資本論」を読む会(2008～2012年)の記録(<http://p.booklog.jp/book/19345/read>)からの重引です。

生産がもっぱら自家需要に向けられているかぎり、交換はごくまれに、それも交換者たちがちょうど剰余分をもっているようなあれこれの対象について、生じるにすぎない。例えば毛皮が塩と、しかもまず最初はまったく偶然的なもろもろの比率で交換される。この取引がたびたび繰り返されるだけでも、交換比率はだんだん細かく決められるようになり、一枚の毛皮はある一定量の塩とだけ交換されるようになる。(大谷訳10頁)

こうして、いつでもどこでも1枚の毛皮はある一定量(a kg とします)の塩とだけ交換されるようになるにつれ、毛皮が塩 a kg と交換されるのはそれが毛皮だからだ、という観念が生まれるという訳です。

この段落では、生産物の価値性格の固定に対する価値量の役割が議論されています。その価値量について、価値が量であることが理解できないとの疑問が出されました。

これに対し、

価値を値打ちと考えると理解できない。商品価値とも言うように一般的な意味の価値ではない。交換価値で考えるとして、例えば 1トンの鉄=2オンスの金 とする。これは量として等しいことを表している。

商品の値段を考えてみると、値段は数で表されているから、量だと分かる。商品の値札は数字で書いてある。

などの説明がありました。

質問者は、商品の価値の意味を「資本論は初版から150年後の今日でも読む価値がある」というときの「価値」と同じと捉えていると思います。なお、この場合の「価値」も、多少は量的側面があります。「資本論は国富論よりずっと読む価値がある」という場合、価値の大小が比較されているからです。

広辞苑で調べると、

物事の役に立つ性質・程度。経済学では商品の使用価値と交換価値とを持つとされる。

ねうち。効用。「貨幣―」「その本は読む―がない」 (哲学用語の部分は省略)

とあります。程度、という説明がありますね。なお「経済学…」の部分の交換価値は、価値とすべきところです。この説明の言い方を借りると、商品の価値とは交換の役に立つ(=交換比率を決める)性質・程度、と言えるでしょうか。

次に、前のところで、商品生産というのは有用物を生産するとあったと思うが、交換できる場合、自分が欲しいものを相手が持っているなら他人のための生産となぜ言えるのか、という質問がありました。

自分は塩を作っているが、相手の持っている毛皮が欲しい。これらを交換する場合、自分は塩を自分のために作ったと言えるのではないか、という主旨かと思います。

ですが、塩を塩本来の使い方(調味料とか塩漬けとか)をする(=使用価値を実現する)のは自分ではなくて、相手です。このことを他人の使用価値を生産すると言っています。

要約(3)に示した科学的認識、「独立し、社会的分業の諸環をなし、全面的に相互依存する、私的労働が、…… 社会が要求する限度に絶えず還元される。」は、(注28)により、恐慌のことだと分かります。なので、恐慌によって、生産は社会が要求する限度に制限されるとなります。作りすぎ(過剰生産)には自動ブレーキがかかるということでしょうか。

※ 議論の主旨を取り違えていることがあるかも知れません。ご容赦下さい。メモを取るとき、漢字が思い出せず議論を聞き逃したりするので (パソコンの使いすぎ?)。

「資本論を読む会」便り

No. 26
2017.9.14

第27回は商品の物神性のところの4回目でした。わずか3段落しか進みませんでした、その分、中身は濃かった？

◆第27回の内容

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。
小見出し直後のゴシック体は当該段落の要点、丸ゴシック体は本文やレジュメの要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店 全集版 による。段落は本文の字下げごとに数える)。
文中の[第1文]等の「文」は、句点(.)で区切られた文章の要素です。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密

【前回の復習】

前回のまとめのあと、今回のところに進みました。

【第10段落】(89) 人間生活の諸形態の考察、…

商品経済の科学的分析は、商品形態の完成形…貨幣や価格の分析から始まった。だが、貨幣形態は、私的労働の社会的性格を物的関係として現わし、これを隠す。

(1) ① 人間生活の諸形態に関する考察・科学的分析…発展過程の既成の諸結果から始まる。

② 労働生産物を商品にする[商品流通の前提となる]諸形態(貨幣や価格)は、人間たちが、この諸形態の内実について解明しようとする前に、
[諸形態の歴史的な性格ではない。彼には諸形態は不変な存在]
すでに社会的な生活の自然形態の固定性を持っている。

③ ・価値量の規定 ← 商品価格の分析

・価値性格の確定 ← 商品の共通な貨幣表現

[第1～4文]

(2) 貨幣形態(商品世界の完成形態)は、私的労働の社会的性格を物的関係として現わし、これを隠す。

[第5文]

(3) ・上着、長靴等がリンネル(抽象的な人間労働の一般的な具体化)に関係する、は奇異な表現

・上着、長靴等を一般的な等価物としてのリンネル(or 金銀)に関係させる

生産者たちにとって、私的労働の社会的総労働に対する関係が、奇異な形態で現われる。

[第6～7文]

この段落も読み進めるのに時間がかかりました。

最初の一文、(1)①の「発展過程の既成の諸結果」とは、発展の結果生まれた、既に存在しているもの、ということでしょう。分析を始めるには、分析の対象物がなくては始めようがな

いわけです。

経済学が分析の対象とした貨幣ですが、貨幣の発明は数千年前のようです。しかし、貨幣が社会の隅々まで行き渡り使われるようになるのは、近代以降でしょう。

この時代以降、生産物は売って貨幣に換え、生産財や消費財は貨幣でもって購入することが、普通のこととして行なわれています。そんなこと当たり前だろ、と、誰しも思っています。また、貨幣なしでやっていくこともできません。(1)②の「労働生産物を商品にする[商品流通の前提となる]諸形態(貨幣や価格)は、……、すでに社会的生活の自然形態の固定性を持っている。」とは、このような状態を指していると思います。

ここで「商品流通」という語が初めて出てきましたが説明がありません。貨幣を媒介とした商品交換の全体を指します。第3章に説明があります。

あと、「人間たち」とはどんな人たちかということですが、貨幣や価格の科学的分析を始めたのは古典派経済学の人々でしょう。

(1)③ こうして、古典派経済学の人々によって、貨幣や価格の分析から価値量や価値の性格が明らかにされました。

ところで、科学的に分析を始めようとした諸形態(貨幣や価格)の「内実」ですが、その「歴史的な性格ではない。」とあります。貨幣や価格といったものが、すでに完成品だから歴史的な性格は問題にされなかった、ということなのでしょう。議論の中で、歴史的観点から商品や貨幣を見るのは難しいことだ、という指摘もありました。

次に(2)です。貨幣形態を商品世界の完成形態といっていますが、第3節 価値形態の最後が、D貨幣形態であったとことと符合します。

私的労働の社会的性格が物的関係として現わされることについては、第3, 4段落で説明されています。商品交換に貨幣が入ることで、これらの物の関係は生産者たちの社会的関係の反映である、ということが、いっそう見えにくくなるという訳です。

ここでは、これまでに何回も出てきていますが、「私的労働の社会的関係」の意味が分かりづらく議論になりました。

物を生産する場合、それは生産者自身が「勝手に」生産しています。この労働が私的労働です。この製品は売れるはずだと考えて生産します。つまり交換(販売)が目的です。自分で使用するのが目的ではなく、他人の使用価値を生産します。こうして、生産者の労働が別の生産者と関係を結ぶことになり、社会的関係を形成します。しかし、貨幣が生産物の交換を媒介することで、生産者の労働相互の関係がより背後に押しやられることとなります。

最後に(3)です。編集人が「奇異」の意味が分かりづらいと言ったところ、参加者の皆さん持参のテキストにより、倒錯した、ばかげたという訳もあるとのことでした。

では「上着や長靴などが、抽象的人間労働の一般的な具体化としてのリンネルに関係する」のどこが奇異だと言うのでしょうか。それは、人間の活動(抽象的人間労働)が、商品の価値という対象的存在となり、しかもそれが価値の化身としてリンネルという物体になっていることです。

したがって、上着や長靴などを一般的等価物としてのリンネル(or 金銀)に関係させる生産者たちにとって、私的労働の社会的総労働に対する関係が、奇異な形態で、つまり物と物との関係として現われることになります。

◆古典派経済学について、次のような文を見つけましたので紹介します。

アダム・スミスに代表される古典経済学は、資本主義社会の生産諸関係の内的関連を探究することによって経済学を科学にした。しかしそれは資本主義的生産を、したがってまた商品生産を、社会的生産の自然的な形態と見なしていた。だから彼らは、商品の価値は労働なのだということは探り出したけれども、なぜ、労働はそのまま労働として現われないで、その生産物の価値というかたちで、「物の属性」という奇妙なかたちで現われるのか、なぜ、自分たちはわざわざこのような形態を分析して価値の実体が労働であることを発見しなければならない、というようなことになっているのか、こうした、経済学が解明すべき肝心なめの問題を、彼らは理解することはおろか、問題として提起することさえしなかったのである。さらに彼らは、資本主義的生産を社会的生産の永遠の自然形態と見誤っていたので、この生産の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態である労働生産物の商品形態の独自性を見逃し、価値形態を研究しようとしなかった。(大谷禎之介: 商品および商品生産, 経済志林, Vol. 61, No. 2, 1993年, p97)

【第11段落】(90) このような諸形態こそはまさにブルジョア経済学の…。

商品の物神性は、客観的なものであり、商品世界に特有である。

(1) 商品流通に前提されている諸形態(段落10)がブルジョワ的経済学の諸範疇をなす。

歴史的に規定された社会的生産様式, 商品生産, 生産関係に妥当した客観的な思想形態

(2) 商品世界の神秘性(商品の物神性)は商品世界に特有なもの。他の生産様式にはない。

まず、「ブルジョワ経済学」とは資本主義を対象とした経済学です。古典派経済学と言い換えても良さそうです。国民経済学のことだとの指摘もありました。

次に、「範疇(カテゴリー)」とは広辞苑によると、

- ① 存在のもっとも基本的な概念(例えば実体・因果関係・量・質など)。
- ② 個々の科学での基礎となる観念。数学における数の観念など。
- ③ 同じ種類のものの所属する部類・部門。

ですが、ここでは①～②の意味です。基本概念と言い換えることができます。

商品・貨幣・価格など(商品流通に前提されている諸形態)が経済学の基本概念であるが、商品社会の生産様式・生産関係に妥当する客観的な概念です。

商品の物神性は、労働生産物が商品として現われることから生ずる、客観的な現象です。単に、そう見えるといった主観的な現象ではありません。

そういうわけですから、商品生産ではない社会では、そのような現象は現れません。

【第12段落】(90) 経済学はロビンソン物語を愛好するから、…。

ロビンソンの労働とその生産物の関係は単純明白で、神秘性はない。

(1) 経済学はロビンソン物語を愛好するから…。(注29) [第1文]

(2) ① ロビンソンの各種の有用労働は、同じロビンソンの(人間労働の) いろいろな活動形態
ロビンソンはこれを自覚

② 自分の時間を自分のいろいろな機能のあいだに正確に配分
必要と仕事の困難度から (経験が教える)。

③ 記帳 ・ 使用対象 ・ 生産に必要な作業,
・ 生産物の一定量に平均的に費やす労働時間 [第2～10文]

(3) ① 生産物と労働の関係は単純明白。神秘性はない。

② 価値の一切の本質的な規定を含む。(価値規定の内容) [第11～12文]
・ すべての労働は人間の身体活動
・ 生産物は一定の労働の量が必要
・ 互いのための労働は社会的形態を持つ(ロビンソンは一人だが)

(1)は、ロビンソンを例解に出す理由を言っています。

そして(2)でロビンソンの労働の特徴が述べられていますが、(3)のまとめにあるように、生産物と労働の関係は単純で、個別の労働と総労働の関係も明確です。

「価値の本質的な規定を含む」とあるので、価値規定の内容を要約のところに書き並べました。これらの内容をロビンソンの労働の中に確認することができます。しかし、生産物は商品にならず価値という属性ありません。

なお、ロビンソン一人の島で「社会的」形態、というのは理解しにくいところです。午後狩りに出かけるロビンソンのために、午前のロビンソンは矢を作っている、みたいな状況が頭に浮かびましたがどうでしょうか。

商品の物神的性格、人と人との関係が物的関係として現われることに係わって、労働者の孤立化が話題になりました。労働力が貨幣を媒介として社会的につながりを持つが、その分人と人とのつながりが希薄になり、孤立化し、バラバラにされているのではないだろうか、ということです。

原注29の中に「オーウェンの平行四辺形」というのが出てきます。マルクス・エンゲルス全集(ドイツ語版)編集部注解によれば、「…オーエンは、そのユートピア的な社会改造計画のなかで、集落が平行四辺形または正方形の形態で設けられれば、経済性の立場からも、居住性の立場からも最も合理的であるということを証明しようとした。」とのこと。

「資本論を読む会」便り

No. 27
2017.10.25

第4節 商品の物神性のところの5回目です。4段落進み、ゴールが射程に入ってきました。

◆第28回の内容

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。
小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。
原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版による。段落は本文の字下げで数える)。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密

【今回の位置づけ】

第4節の初めからざっと振り返ってみます。

商品の分析から、商品は感覚的にして(使用価値)かつ超感覚的なもの(価値)であることが、明らかにされました。(商品の神秘的性格)

それは、生産物の商品形態は

- 1) 人間自身の労働の社会的性格を、労働生産物そのものの対象的性格として反映させる
- 2) 人間自身の労働の社会的性格を、労働生産物の社会的な自然属性として反映させる
- 3) 総労働に対する生産者の社会的関係を労働生産物の社会的関係として反映させる

からです。その結果、

生産物が独立して生産物間、生産物・人間間で関係を結ぶように現われることになります。マルクスは、これを物神崇拜と呼んでいます。

引き続いて、生産物が商品となる要因を明らかにし、人間の社会的関係が商品の社会的関係の背後に押しやられていく仕組みを詳述しています。

そして貨幣形態は、私的労働の社会的性格をよりいっそう物的関係として現わし、これを隠す働きをし、商品生産の諸関係の中に囚われていると労働生産物の価値性格が永遠のものと映る、と指摘しています。

この商品世界の神秘性・物神性は、客観的なものですが、

商品世界に特有であり、他の生産様式にはない。

のです。ゆえに、商品生産以外の他の生産様式を考察するなら、生産者・労働・生産物の間の関係は明瞭で神秘的なものは一切ないはずで。そこでマルクスは4つの例を、第12～15段落で取り上げています。

- ・ 第12段落 ロビンソンの孤島での生産
- ・ 第13段落 中世ヨーロッパの人的従属関係にある社会
- ・ 第14段落 農民家族の素朴な家長制的な勤労
- ・ 第15段落 共同の生産手段で労働し、個人的労働力を社会的労働力として意識的に支出する、自由な人々の結合体

このうち、第12段落は前回読み終わり、ロビンソンの労働とその生産物の関係は単純明瞭で、神秘性はないことを確認しました。

【第13段落】(91) そこで今度はロビンソンの明るい島から暗い…

中世ヨーロッパの人的従属関係が支配している社会の場合

①この社会は人的従属関係(農奴-領主、臣下-君主、俗人-聖職者)が支配している

②労働や生産物は、夫役や貢納として社会的機構の中に入る。

労働の現物形態、その特殊性が労働の直接に社会的な形態となっている。

夫役は時間で計測され、領主のための労働力の一定量の支出であることは明瞭

十分の一税のような貢納も、明確なものである

③この社会では、労働における人と人の社会的関係は、人的関係として現われ、労働生産物どうしの社会的関係になっていない。

人的従属関係に関連して。ルーマニア諸州では農民の共同耕作地を領主層が接收し領地とするとともに、そこでの共同労働が夫役労働になり、農民が農奴化したのだそうです。(資本論 第1巻-第3編-第8章-第2節)

このような社会では、1年のうちの何日間かが領主の領地での夫役労働で、残りの日数は自分のための労働、という具合になっています。この夫役労働が社会的な労働であること、およびその分量は一目瞭然です。

貢納の例として十分の一税があげられています。キリスト教会が信徒に対して収穫の10分の1を納めさせました。5世紀に始まり、フランス革命や19世紀の農奴解放まで続いたそうです。信徒は教会のために、自分の労働の10分の1を支出している訳です。

農奴と奴隷はどう違うのかが少し議論になりました。奴隷(日本では奴婢などと呼ばれた)は基本的に物扱いで、雑役に使われていました(近代のアメリカ大陸などでは、プランテーションで農業労働をさせられました)。

農奴は基本的には農民です。自分の耕作地で働く他、領主の領地で夫役労働をさせられます。遺産・結婚・住居の移動が制限されるなど、領主による経済外的束縛を受けています。

農奴の語は、学校で習った日本史では出てきませんでしたが、編集人の頭には、武士に支配された百姓の姿が思い浮かびました。

【第14段落】(92) 共同的な、すなわち、直接に社会的となっている労働を…、(注)30

直接に社会化された労働として、農民家族の素朴な家長制的な勤労を考察する。

原始共産制まで遡るまでもなく、身近なところに例がある。

①農民家族の労働 家族の欲望 穀物 家畜 撚糸 亜麻布 被服

労働 農耕 牧畜 紡績 機織り 裁縫

②生産物は、家族に対して、商品としては相対しない。

家族の労働は、そのままで(家族内での)社会的な諸機能を果たしている。

③性別・年齢等労働の自然条件が労働の配分・労働時間を規制する。

個人の労働力の支出(継続時間で計測)は、労働そのものの社会的規定として現れる。

∴ 個人的労働力は、家族の共同労働の構成要素だから。

注30によると、原始共同体は、世界の歴史の中で、広く一般的に存在したとのこと。

この家族内の社会では、彼らが必要とする物を生産する当たり、成員の性別・年齢等の条件に応じて労働や労働時間を配分します。その労働結果の生産物は、彼らで分配し使用しま

す。これらは商品ではなく、従って何の神秘性もなく、生産物間の関係が労働の関係を規定することはありません。例えば、被服の生産に必要な亜麻布を作りすぎたり、不足したりといったことは起こりません。労働は計画的・整合的に組織されるからです。

ここで、工場内の分業でも同様なことが言えるのではないかと問題提起がありました。

これに対して、次のような指摘がありました。

家族の分業では、各成員は自分の労働の意義を意識しているが、工場内分業では各労働者は指示されるままに労働し、意識的な労働ではない。

また、最終的な生産物は商品であり、自分たちが使用するものではなく、外部に出すという点で異なっている。

もっともな指摘だと思います。ですが、編集人は、工場内の分業は意識的・計画的に組織され、各部署で作られた部品は商品として現われず神秘性はないと思えてしまいます。どんなものでしょうか。

あと、工場労働について、労働強化、残業の強制、労働運動の後退などに話が及びました。

【第15段落】(92) 最後に、気分を変えるために、共同の生産手段で…

共同の生産手段で労働し、個人的労働力を社会的労働力として意識的に支出する、自由な人々の結合体。(つまり共産主義社会)

(1) ①ロビンソンの労働のすべての規定が社会的に再現する。

②総生産物は社会的生産物(諸個人の生産物、使用対象。一人の物ではない)

↳ 一部は再生産手段…したがって社会的なものである

↳ 一部は生活手段 → 諸個人の消費にあてる…したがって分配が必要

(2) ①分配の仕方 次の要因で変化する。

・社会的生産有機体(Organismus, 組織) そのものの特殊な種類

・対応する生産者たちの歴史的発展度

②商品生産との対比のために、各自の労働時間によって規定されていると前提すると

・労働時間は二重の役割を果たす。

1) 労働時間の社会的に計画的な配分

→様々な欲望に対する様々な労働機能の正しい割合を規制

2) 共同労働への生産者の個人的参加の尺度となる

∴生産物の個人消費部分の、個人への分配の尺度となる

(3) 人々が彼らの労働および労働生産物に対してもつ社会的諸関係は、生産においても分配においても透明で単純

共産主義社会は、初期段階と、生産力が一層発展した段階が区別されています。この初期段階を社会主義社会、発展した段階を共産主義社会、と言っています。

これについては、「ドイツ・イデオロギー」にあるとの発言がありました。

なお、(2)②の分配では、社会的控除については捨象されています。社会的控除は、子供や労働能力を失った人々が生活できるようにするために、あるいは予備として必要です。

【第16段落】(93) 商品生産者の一般的な社会的生産関係は、…

宗教の世界は現実の世界の反映でしかない。(フランス語版の段落冒頭)

(1) 商品生産社会

・私的諸労働を同等な人間労働として互いに関係させる。

・キリスト教(特に、プロテスタント、理神論等)が、最も適応した宗教形態である。

(2) 古代アジア的, 古代的等の生産様式

①商品生産は従属的, 副次的である。

(ただし, 共同体が崩壊の段階に入ると, 重要な役割を演じる。)

②これらの社会は単純で明瞭だが, 自然的な種族結合の社会 (未成熟な社会)であり, 直接的な支配関係または隷属関係にもとづく社会である。

それは, 労働の生産諸力の発展段階の低さに制約されており, それに対応して局限された物質的生産過程の内部における諸関係 } によって制約されている。
人間相互間と自然とにたいする諸関係 }

③このような現実の局限性が, 古代の自然宗教や民族宗教に反映している。

(3) ①現実世界の宗教的反映の消滅条件

実践的な日常生活の諸関係が, 人間にとって相互間および対自然の, いつでも透明な合理的関係を日常的に表すようになること。

②自由な人間社会の, 意識的な計画的な生産においてはじめて物質的生産過程が神秘性をぬぎすてることが可能となる。

そのためには, 社会の物質的基礎・一連の物質的存立条件が必要である。

この物質的条件は一つの長い苦悩にみちた発展史の自然発生的な所産である。

古代・古典時代の商品生産に関して, 本文には「本来の商業民族^(a)は, エピクロス^(b)の神々^(b)のように, またはポーランド社会の気孔^(c)のなかのユダヤ人^(c)のように, ただ古代世界のあいだの空所に存在するだけである。」とあります。

(A) B.C.1000年頃のアラム人(内陸貿易), B.C.800年頃のフェニキア人(地中海貿易)など?

(B) 全集版の注解30に, 神々は世界と世界の間の空所に存在していて, 万物の発展にも人間の生活にもなんの影響も及ぼさない(エピクロス), と, あります。

(C) 18-19c のポーランドなどに住むユダヤ人の大部分は, あちこちの農村に住む零細商人であったそうです。

プロテスタントでは神の前での人間の平等が強調されている, と, どなたかが発言されました。それに対し, カトリックは法王を頂点とする階層構造をなしています(中世社会?)。

理神論は17~18世紀のヨーロッパに現れ, 汎神論などとも言います。世界の根源として神の存在を認めるが, 人格的な主宰者とは考えず, 奇跡や啓示の存在を否定します。(広辞苑)

生産様式と言う語が出ていますが, 「経済学批判」に次のような説明があります。

「大づかみにいって, アジア的, 古代的, 封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されうる。」

旧ソ連や中国など, いわゆる”社会主義社会”が話題になりました。生産力の発展が自然発生的で, 100年も経っているのに(今年はロシア革命100年です), 宗教がなくなっていないようです。

これらの諸国の生産物は, 商品として生産されています(した)。従って, この段落の(1)に該当し, (3)の宗教の消滅条件が成立していないと思われます。今でこそ先進資本主義国と肩を並べるほどになりましたが, 生産力がずっと低く, 社会主義が実現できる物質的基礎を欠いていたのです。では何だったのかというと, 国家資本主義と規定することができます。旧ソ連はこの段階を”卒業”して, 資本主義国ロシアになっています。中国は, 自らはまだ社会主義と言っていますが, 今では立派な資本主義国ではないでしょうか。

「資本論を読む会」便り

No. 28
2017.11.10

第4節 商品の物神性のところの6回目です。長い注が3つもあり、1段落しか進みませんでしたが、次回でこの節も終わりそうです。

◆第29回の内容

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。
小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。
原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版による。段落は本文の字下げで数える)。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密(その6)

[第17段落] (94) ところで、経済学は、不完全ながらも価値と価値量とを分析し、…… 注(31)～(33)
古典派経済学は、なぜ労働が価値となって現われるかを解明しなかった。

(1) 第1～2文

古典派経済学は不完全ながらも^(注31) 価値と価値量とを分析し価値形態の内容を発見した。
しかし、
なぜ、価値規定の内容が価値形態をとるのか
つまり、なぜ労働が価値になるのか
なぜ労働の継続時間が価値の大きさになるのか
なぜ労働の社会的性格が生産物の社会的関係になるのか
という問題を提起しなかった。(注32)

(2) 第3～4文

その理由

- a) 資本主義社会の定式(価値、価値量、貨幣など)は、ブルジョア的意識にとって自然なもの。
- b) 経済学は、資本主義以前の社会を、不自然・人為的と見なす。注(33)

この要約で、(2)の a) 資本主義社会の定式、とした箇所は、本文では

生産過程が人間を支配^{ひたい}していて人間はまだ生産過程を支配していない社会構成体に
属するものだとその額に書かれてある諸定式…

となっています。

また、(2)のb) は

先キリスト教的宗教が教父たちによってなされたと同じ取扱い
と書かれているところです。

さて、「額にかかれてある」について。第4節 第8段落 には、

価値の額に価値とはなんであるかが書いてあるのではない。

という文がありました。商品が価値であることがわかって、価値の正体はいろいろと吟味し、研究しなければ分からない、という意味でした。

今度は、

諸定式(価値, 価値量, 貨幣など)の額に

それらは生産過程が人間を支配していて人間はまだ生産過程を支配していない社会構成体に属すると書かれている

となっています。

報告者は、資本論でのこれまでの分析を踏まえて、つまり価値等の本質的な内容が分かったので「額に書かれてある」と書いているのではないかと発言しました。これに対し、議論の方は、価格の変動・生産調整・恐慌などの現象により、生産過程を支配していないことは誰にでも分かることだ、そういう意味だということになりました。しかし、この「便り」を書いていて、「まだ生産過程を支配していない」という表現からみて、この「社会構成体」は歴史的発展の途中にあることを含意しているように思いました。とするなら、これは古典派経済学の認識ではないはずです。どんなものでしょうか。

ところで、要約(1)の「…という問題を提起しなかった。」に関連して、ガリレイが似たような事を言っていたのを思い出しました。(「新科学対話」下, 第3日冒頭, 岩波文庫 (1948) p3)

……自然界に於ては、運動より古い、根源的なものはない。従ってこれについての哲学者たちの論著は、数に於ても量に於ても決して少なしとせぬ。にも拘らず、私は実験により、従来観察もされず、証明も試みられなかった、自然の極めて重要な特性を幾つか見出したのである。……

地動説ゆえに宗教的迫害を受けましたが、自分の研究の道は後世の科学の発展に通ずることを確信していました。実際、すぐ後にニュートンが出て、運動の法則や万有引力の法則を発見したのです。

■注(31)

リカード・古典派経済学の不完全性は、抽象的人間労働と具体的労働の区別が不明瞭な点にある。

(1) 第1文

リカードの価値量の分析は不十分。詳しくは、第3部総過程の諸形態(資本論第3巻), 第4部理論の歴史(剰余価値学説史or資本論第4巻)

(2) 第2~4文

古典派経済学は、価値となって現れる労働(抽象的人間労働)を、生産物の使用価値となって現れる労働(有用労働)から、明文と明瞭な意識とをもって区別していない。

しかし実際には、区別している。労働をあるときには量的に(すなわち抽象的人間労働として)、ある時には質的に(すなわち有用労働として)、考察しているからである。

だが、労働の量的な相違は、質的な同等性、従って労働の抽象的人間労働への還元を前提することに、気づかない。

(3) 第5~12文

上記(2)の具体例。

a) デステュットの引用。この注の後半に要点が書かれている。

富を形成する全ての物は、

①それらを作り出した労働を表わす

②それらの2つの違った価値(使用価値, 交換価値)を労働の価値から得る

として、

労働の価値を前提し、それによって他の諸商品の価値を規定

b) リカードは、デステュットの主張を次のように理解した。

使用価値にも交換価値にも労働(労働の価値ではない)があらわされる、と。

つまり、リカードは、使用価値と価値に、二重に表わされている労働の二重的性格をほと

んど区別できていない。

- ∴ 1) デステュットの価値源泉としての労働の理解は、自分と一致するが、
- 2) デステュットの価値概念は、自分とではなくセーと一致して、リカードは驚く。

上記(3)のb)ですが、デステュットの労働の理解が自分と一致しているのに、彼の価値概念は自分とは一致してないので戸惑ったと言うことでしょう。

ここで、リカードとは異なる、セーの価値概念というのが出てきるので、念のため調べました。

”物の価値(富の唯一の属性)は物の効用、すなわち人間の欲望を満足させる物の性能にもとづく”とする見地から富を自然的富、社会的富の二種類にわけ、前者は空気や水等のごとく自然から無償で与えられる物の効用、後者は自然力・資本・労働の三要素の共同作用から生ずる物の効用で、その評価によって交換されると考える。つまりスミスの使用価値と交換価値の概念を効用説にすり替えたもの。(資本論辞典 p510)

この注について、中ほどにあるデステュットの「イデオロギー要論」からの引用について、それはどういう意味かという質問が出されました。上の要約にあるように、引用の直後にマルクス自身が要点をまとめていますから、それでいいということになりました。

■注(32)

古典派経済学は、商品価値の分析から価値を交換価値たらしめる形態を見つけ出せなかった。それというのも、ブルジョア的生産様式を、社会的生産の永久的な自然形態と見誤ったため、価値形態、商品形態 等々の特殊性 (歴史性) も看過したから。

(1)第1～2文

価値を交換価値となす価値形態を発見できなかったことは、古典派経済学の根本欠陥の一つである。

(スミス、リカードでさえ、価値形態を軽視。商品そのものの性質には外的なものとした)

(2)第3～6文

その原因

ブルジョア的生産様式を、社会的生産の永遠の自然形態と見誤ったため、価値形態、商品形態 等々の特殊性 (歴史性) を看過したからである。

実際は、労働生産物の価値形態は、ブルジョア的生産様式の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態なので、この生産様式は、社会的生産の特殊な一種類として、したがってまた同時に歴史的に、特徴づけられている。

(3)第7～9文

その結果

労働時間による価値量の計測では一致している経済学者たちの間でも、貨幣、すなわち一般的等価物の完成した姿については、最も雑多な、最も矛盾した見解が見られる。

特に、ありふれた貨幣の定義ではもはやまにあわない銀行業の取扱いにさいして、明瞭に現れてくる。

(4)第10文

- ・古典派経済学…ペティ以来の、ブルジョア的生産関係の内的関連を探究している。
- ・俗流経済学… 外観上の関連のなかをさまよっている。

上記要約の(3)について、その内容はここでは分かりません。貨幣については第3節D 貨幣形態のところから出てきました。また、第3章でさらに詳しく展開されています。銀行については、第3巻の利子生み資本のところから出てきます。

この注では、価値と価値形態の理解がポイントだ、という指摘があり、これらについて議論を深めました。

ここで、価値、交換価値、単純な価値形態について、議論も踏まえて簡単に復習しておきます。

<価値>

- ・商品が交換されるとき、交換比率を規定する商品の属性
- ・実体は抽象的人間労働
- ・生産物が普遍的に商品として生産されるに従い、生ずる。
- ・生産物は、私的に、他人の使用のために、生産されることで、商品となる。

<交換価値>

- ・A商品x量と交換されるB商品y量を、A商品y量の交換価値という。

<単純な価値形態>

- ・B商品y量が、A商品x量の交換価値であるとき、それはA商品x量の価値を表わす。
- ・この、交換価値によって価値を表現する形式を、単純な価値形態という。

A商品x量=B商品y量 と書き表す。等号は価値量が等しいことを表す。

ということで良かったかと思います。この単純な価値形態が、展開した価値形態、一般的価値形態、貨幣形態へと発展することは、第3節で学んだところです。

さて、上記要約(1)の「価値を交換価値となす価値形態」というのが分かりずらかったのですが、ようするに単純な価値形態ということでしょう。ですので、古典派経済学は、交換価値が価値を表現している、ことに気づかなかったということだと思います。そのため貨幣を正しく理解できず混乱している(要約(3))、ということだと思います。

※ レジュメは、注(33)まで用意していましたが、時間切れで割愛することになりました。上記2つの注よりは読みやすいので例会では省略し、次回は第18段落から読むことになりました。



前号で、人的従属関係に関連して、農奴と奴隷の違いを議論したことや、農民が農奴化した経緯、農奴解放などについて少しふれましたが、その後思い出したことがありました。

●「女城主直虎」

NHKの大河ドラマです。直虎と盗賊の頭とのやり取り(5月28日の放送)が印象に残ってメモしておいたのを見つけました。直虎が頭に向かって盗人であることを非難したあと、正確なセリフではないのですが大体こんなやり取りをしていました。

頭 「武士、領主のほうによっぽど盗人だ。」

「自分では米を作らず、百姓に作らせ年貢を納めさせている。」

直虎「領地は井伊家代々の土地。領主は百姓を守っている。」

頭 「土地は、先祖が元の所有者から奪ったものだろう。」

第3編第8章第2節にある、ルーマニアでの農民の農奴化の話と良く似ています。

●「白いトロイカ」

子供の頃読んだ漫画です。ロシアの農奴解放の歴史を舞台に、歌姫の生涯を描いた作品です。内容はすっかり忘れましたが、「農奴が解放されたのは、〇十年後のことであつた。」といった文で終わっていた(多分)のが印象的でした。

「資本論を読む会」便り

No. 29
2017.12.17

第4節 商品の物神性のところを7回目にして終わりました。これで第1章を終わったことになります。2015年5月に「資本論を読む会」を始めてから2年半。著者自身の言う通り最も難しいところですし、商品の理解が今後の展開を理解する基礎となるのですから、月1回のペースではこのくらいの期間になるのもやむを得ないかと思います。

今回からまた参加者が増え、議論も一段と活発になりました。

◆第30回の内容

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。
小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。
原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版による。段落は本文の字下げで数える)。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密(その7)

[第18段落] (97) 商品世界に付着している呪物崇拜、…。

物神崇拜, 社会的な労働規定の対象的外観 → 経済学者を惑わす。

例: 交換価値形成における自然の役割についてのつまらない争論

まず、物神崇拜について復習しました。第4段落のところですよ。

商品は、人間によって生産され、交換されます。

商品は価値として、互いの交換比率はこれこれだと、商品自身の性質として現れています。

また、もし交換されずに残ったとすると、それは社会が必要とする以上の使用価値を生産したからで、生産者は生産量を調整することを余儀なくされます。

すなわち商品は、人間から独立して相互に関係している物として、また、人間の行動を規制するものとしても現れているということです。

ところで、宗教的世界では「人間の頭の産物が、それ自身の生命を与えられてそれら自身の間でも人間との間でも関係を結ぶ独立した姿に見え」るので、これになぞらえて、「商品世界では、人間の手の生産物がそう見える。これを私は呪物崇拜と呼ぶ」ということでした。

ここで注意しなければならないのは、物神崇拜の語は、商品に対する人間の意識や態度を示す語ではないことです。商品の、上に説明した性格、現れ方を指しています。

金や貨幣に対する崇拜意識の誕生には、商品の物神的性格も係わりがあるでしょう。ですが、この節は金や貨幣に対する崇拜意識を論じているものではありません。

「社会的な労働規定の対象的外観」というのも分かりにくい表現です。労働の社会的性格が物の社会的属性や物の社会的関係として現れる客観的現象を指しています。ゆえに物神崇拜と同じだと言えます。

交換価値という語が使われていますが、ここでは価値の意味で用いられています。「交換価値(の語)は一義的ではなく、いろいろの意味に用いられている。」(資本論辞典: p137) とのこと、今後も読み進めていく上で注意が必要です。

さて、つまらない争論とは何か、という質問がありました。Kさんから、リカード学派を解体させた経済学者たちの次のような議論であろうと説明がありました。

たとえば酒倉に寝かせているワインですが、その期間中に自然過程の作用を受けます。労働が費やされることなしに生産過程の中に留まるのですが、この期間は利潤を生みだしているものとして計算されます。これについて、ミルは、たとえ前提からすれば実際にはそうでないにしても、労働を吸収している期間とみなすことができるとしています。つまり、商品に労働が加えられない期間を労働期間として計算し、したがってこの自然過程が価値を形成していると見なしています。

これは、マルクス:「剰余価値学説史」の (b)労働概念の自然過程への拡張によるそれへの歪曲。交換価値と使用価値との同一視 (全集26巻III, p231) という項目からの紹介です。くわしくは、そちらをご覧ください。

引き続いて、今の日本でそんなこと言っている人はいるのかという質問がありましたが、それは近代経済学がそうだということでした。(価格を財貨の効用、つまり使用価値から説明している。)

[第19段落] (97) 商品形態は、ブルジョア的生産の最も一般的で…

- (1) 商品形態はブルジョア的生産の最も一般的で未発展な形態なので、物神的性格は比較的容易に見抜くことができる。
- (2) 具体的な形態(貨幣や資本など)になると、単純さの外観さえ消える
 - ・ 重金主義。貨幣(金銀)は社会的生産関係を自然的形態で表わしている、ということを見抜けなかった。
 - ・ 近代の経済学は重金主義を批判するが、資本を取り扱うやいなや物神崇拜に陥った。
 - ・ 地代は土地から生まれるとする重農主義の幻想が消えたのは、どれほど以前のことが?

商品形態の物神的性格は比較的容易に見抜くことができるといっていますが、商品の発展した形態である貨幣などと比べて、ということだと思われます。したがって、(2)の具体的な形態とは貨幣や資本のことです。具体的という語は一般的に対する語です。

重金主義などの語。レジュメの説明も参考にして簡単な説明を付けておきます。なお、(d)について、レジュメでは資本論辞典の“古典派経済学”の項から引用されていましたが、“近代的経済学”の項を見つけたので、こちらから引用しておきます。

(a) 重商主義

16-18c にわたる資本の<本源的蓄積>の時期にあらわれた経済政策および経済理論の総称。マルクスは前期を重金主義、後期をより発展した重商主義としている。(資本論辞典)

(b) 重金主義

貨幣が本性上金銀であるところから、金銀を富の唯一の形態とみて、……極度に重要視し、……。 (資本論辞典)

(c) 重農主義

18c 後半の重農学派の経済理論および経済政策。資本主義生産と流通の法則を人間の意志や政治などから独立の客観的法則として把握し、国家の富の源泉たる<純生産物>=剰余生産物は、流通からではなく、農業生産からだけ生ずるとした。(岩波小辞典: 経済学)

(d) 近代の経済学

近代ブルジョア社会の経済的構造を分析し、“資本主義的生産様式の理論的表現としての”意義を持つところの経済学。古典経済学を含むが、それと同時にこの語は、<古典経済学>と<俗流経済学>との両者を含めての近代におけるブルジョア経済学という…意味にも使用される。(資本論辞典)

(1)の“商品形態はブルジョア的生産の最も一般的で未発展な形態”に関して、貨幣と区別された商品だと思うが、論理的な話か歴史的なのか、という質問がありました。

これはブルジョア経済の話で、商品生産が未発展の社会でも商品は存在したということです。議論の中で出てきた、「経済学批判要綱」は、その「序文」が「経済学批判」の付録として納められています(岩波文庫版。全集版など)。

特に議論はありませんでしたが、(2)の“重農主義の幻想が消えたのはどれほど以前のことか”の意味について。

反語表現ですから、そんなに以前ではない、という意味だと思われます。そうすると、土地の物神性を見抜くことが困難であった例として出されていることになります。

しかし、“近代の経済学が資本を取り扱う段になると、その物神性を見抜くことができなかった”を補足しているとすると、近代の経済学は重農主義の問題点はとうに克服したのに資本の取扱いでは物神性を克服できていない、という意味になります。

ケネー: 経済表	1758
スミス: 国富論	1776
リカード: 経済学および課税の原理	1817
マルクス: 資本論第1巻	1867

という年表を見ると、あとの解釈のほうが良いような気がします。しかし、いずれにしても、資本の物神性を見抜くのは困難であったという、この段落の趣旨は変わりません。

[第20段落] (97) だが、先まわりすることをやめて、ここでは…。

(1) 商品に語らせると、

- ・人間の関心事は使用価値。だが、使用価値は物としてのわれわれに属さない。
- ・物としてのわれわれに属するのは価値。われわれは交換価値として互いに関連するから。
(つまり物と物との関係として現れている。)

(2) 経済学はこれをどう見るか？

- ・価値(交換価値)は物の属性、富(使用価値)は人の属性。
価値は交換を含むが、富は含まない。
- ・富(使用価値)は人間の属性。価値は商品の属性。
真珠やダイヤモンドは(それ自体として)価値をもっている。

段落冒頭の、「先まわりすることをやめて…」というのは、前段落が資本(貨幣ののさらに発展した形態)にまで言及しているのですが、資本については第4章で出てくるので、こう言っている訳です。

この段落は、前段落に続いて、次の第21段落とともに、商品の物神性にとらわれた経済学の認識の実例を示しています。

経済学は逆に捉えているということか？ という質問がありましたが、そういうことです。すでに学んだように、価値の実体は抽象的人間労働です。人間の労働が、商品の価値となって

います。商品と商品の関係は、商品が交換されるということにあります。私的に独立した生産者たちは、自然発生的な分業を担っており、その生産物を交換することなしに生きていくことができません。ここに、商品に価値が生じる基礎があります。この、人間と人間の関係が、商品と商品の関係となって現われているわけです。ここに出てきた経済学は、これを逆に捉えているわけです。これが、“物神性に囚われている”ということです。

この段落について、Kさんから、資本論初版には、商品に語らせる前に次のような文があることが紹介されました。

商品にたいする商品の関係、たとえば脱靴器にたいする長靴の関係にあつては、脱靴器の使用価値、したがって脱靴器の現実の物的な諸属性の有用性は、長靴にとっては全くどうでもよい。長靴商品は、それ自身の価値の現象形態としてのみ、脱靴器に関心をもっている。

長靴(ブーツ)にはファスナーなどついてなかったのでしょうか。この文に続いて、「もし商品がものを言えるとすれば…」と続きます。

この段落では、商品の現象形態、商品という物どうしの関係を商品に語らせ、経済学はそれをそのままに受取っている、ということを示しています。

[第21段落] (98) 真珠やダイヤモンドの中に交換価値を…。(注)36

- (1) 真珠やダイヤモンドのなかに交換価値を発見した化学者はいない。
- (2) にもかかわらず、経済学者は、物の使用価値はその物的属性に関わりないのに、物の価値は、物としてのそれに備わっているとする。
- (3) 経済学者がそう考える根拠
 - ・使用価値は…物と人との直接的関係において実現される。
 - ・価値は…交換…一つの社会的過程においてのみ実現される。物どうしの関係と見ている。

前の段落の、経済学者は真珠やダイヤモンドはそれ自体として価値を持っていると受けて、真珠やダイヤモンドの中に価値を発見した化学者はいないと、皮肉っています。(3)にあるように、経済学者は商品の物神性に惑わされて、このように考えたということでしょう。

物事を逆転して捉えている例えとして、ドッグベリーの台詞が出てきます。全集版の注解によれば、シェークスピア:「むだ騒ぎ」(から騒ぎ)の登場人物です。これについては、文学に詳しいMさんから説明がありました。

喜劇で、ドッグベリーは警官で道化役だそうです。訳の分からないことを言って、人々を混乱させるのだそうです。引用されているのは、その訳の分からない台詞のひとつということです。

[(注)36]

- ・『考察』の著者やベリーは、リカードが交換価値を単に相対的なものから或る絶対的なものに転化させたとしている。

しかし、リカードは、これらの物が交換価値としてもっている外観的相対性を、外観の背後に隠されている真の関係、つまり人間労働の単なる表現としてのそれらの物の相対性に還元した。